



Interstage Application Server



インストールガイド

Windows

B1WS-0836-01Z0(00) 2010年8月

まえがき

本書の目的

本書は、"Interstage Application Server インストールガイド -Windows(R)-"です。Interstageを運用する前に必要となるソフトウェア条件、 資源、インストール方法について説明しています。

本書は、Interstageのサーバパッケージのインストールを行う方を対象に書かれています。

クライアントパッケージのインストールについては、クライアントパッケージに同梱されているインストールガイドを参照してください。

なお、"付録C Interstage管理コンソールによるInterstage運用を安全にご利用いただくモデル"で、Interstage管理コンソールによるInterstage 運用を安全にご利用いただく方法として、ひとつのモデルを説明しています。Interstage管理コンソールによるInterstage運用をご利用 いただく場合、最初に参照してください。

前提知識

本書を読む場合、以下の知識が必要です。

・使用するOSに関する基本的な知識

本書の構成

本書は以下の構成になっています。

第1章 インストール概要 Interstageのインストール概要について説明しています。

第2章 インストール条件 Interstageのインストール条件について説明しています。

第3章 インストール時の注意事項 Interstageのインストール時の注意事項について説明しています。

第4章 インストール作業 Interstageのインストール作業について説明しています。

第5章 特定の機能に関する注意事項 Interstageの機能に関する注意事項を説明しています。

付録A Fujitsu XMLプロセッサのインストール Fujitsu XMLプロセッサのインストールについて説明しています。

付録B サイレントインストール サイレントインストールについて説明します。

付録C Interstage管理コンソールによるInterstage運用を安全にご利用いただくモデル Interstage管理コンソールによるInterstage運用を安全にご利用いただく方法として、ひとつのモデルを説明しています。

付録D Java監視機能のインストール Java監視機能のインストールについて説明しています。

商標

Microsoft, Active Directory、ActiveX、Excel、Internet Explorer、MS-DOS、MSDN、Visual Basic、Visual C++、Visual Studio、Windows、Windows NT、Windows Server、Win32 は、米国およびその他の国における 米国Microsoft Corporationの商標または登録商標です。

- Sun、Sun Microsystems、Sunロゴ、SolarisおよびすべてのSolarisに関連する商標及びロゴは、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc.の商標または登録商標です。
- その他の記載されている商標および登録商標については、一般に各社の商標または登録商標です。

輸出許可

本ドキュメントを非居住者に提供する場合には、経済産業大臣の許可が必要となる場合がありますので、ご注意ください。

著作権

Copyright 2010 FUJITSU LIMITED

2010年8月 初版

<u>目 次</u>

	1
1.1 サーバタイプ	1
1.2 アプリケーションサーバ機能のインストール	1
1.2.1 標準インストール	2
1.2.2 カスタムインストール	
1.3 管理サーバ機能のインストール	4
1.4 Web Package機能のインストール	5
1.5 機能の追加と削除	5
1.6 Interstageのサービス	6
第2章 インストール条件	8
2.1 動作基本ソフトウェア	8
2.2 排他ソフトウェア	9
2.3 必要な修正プログラム	
2.4 必要なパッケージ	
2.5 インストール時に必要なディスク容量	
2.6メモリ容量	
第3 草 1 ンストール時の注意事項	
3.1 移行上の注意	
3.2 Windows Server 2003 x64 Editionsにインストールするとき	
3.3 Windows Server 2008にインストールするとき	
3.4 Systemwalker Centric Managerを導入するとき	
3.4.1 InterstageかインストールされているコンピュータにSystemwalker Centric Managerの連用管理サーバをイ 13	ンストールするとき
3.4.2 Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバがインストールされているコンピュータにInterstageをイ 15	ンストールするとき
3.4.3 Interstageを再初期化する	
3.5 Systemwalker/PkiMGR、InfoCA、COMMERCESTAGEがインストールされているときの注意事項	
3.6 Windows Defenderが有効になっているときの注意事項	19
3.7 暗号化属性のフォルダにインストールするとき	
第4章 インストール作業	21
4.1 インストール前に必須な作業	
4.2 新規インストール	
4.2.1 かえたールの開始	
4.2.1 インスト アレック用始	
4.2.1 インヘド ルの研究 4.2.2 タイプの選択	
 4.2.1 インストールの確認 	
 4.2.1 インスト ルの研知 4.2.2 タイプの選択 4.2.3 インストールの確認 4.2.4 Interstageのインストール先の設定 	23 23 24 26 26 26
 4.2.1 インスト ルの研知 4.2.2 タイプの選択 4.2.3 インストールの確認 4.2.4 Interstageのインストール先の設定 4.2.5 インストール機能の選択 	
 4.2.1 インスト ルの囲始. 4.2.2 タイプの選択. 4.2.3 インストールの確認. 4.2.4 Interstageのインストール先の設定. 4.2.5 インストール機能の選択. 4.2.6 JDKまたはJREの選択. 	
 4.2.1 インスト ルの囲始 4.2.2 タイプの選択 4.2.3 インストールの確認 4.2.4 Interstageのインストール先の設定 4.2.5 インストール機能の選択 4.2.6 JDKまたはJREの選択 4.2.7 JDKまたはJREのインストール先の設定 	
 4.2.1 インスト ルの研知 4.2.2 タイプの選択 4.2.3 インストールの確認 4.2.4 Interstageのインストール先の設定 4.2.5 インストール機能の選択 4.2.6 JDKまたはJREの選択 4.2.7 JDKまたはJREのインストール先の設定 4.2.8 セキュリティ運用形態の選択 	
 4.2.1 インスト ルの研知 4.2.2 タイプの選択 4.2.3 インストールの確認 4.2.4 Interstageのインストール先の設定 4.2.5 インストール機能の選択 4.2.6 JDKまたはJREの選択 4.2.7 JDKまたはJREのプンストール先の設定 4.2.8 セキュリティ運用形態の選択 4.2.9 ポート番号の設定 	23 23 24 26 26 26 28 28 28 29 30 30 31
 4.2.1 インスト ルの研知 4.2.2 タイプの選択 4.2.3 インストールの確認 4.2.4 Interstageのインストール先の設定 4.2.5 インストール機能の選択 4.2.6 JDKまたはJREの選択 4.2.7 JDKまたはJREのインストール先の設定 4.2.8 セキュリティ運用形態の選択 4.2.9 ポート番号の設定 4.2.10 メッセージマニュアルのインストール選択 	23 23 24 26 26 28 28 29 30 30 31 33
 4.2.1 インスト ルの研知 4.2.2 タイプの選択 4.2.3 インストールの確認 4.2.4 Interstageのインストール先の設定 4.2.5 インストール機能の選択 4.2.6 JDKまたはJREの選択 4.2.7 JDKまたはJREのインストール先の設定 4.2.8 セキュリティ運用形態の選択 4.2.9 ポート番号の設定 4.2.10 メッセージマニュアルのインストール選択 4.2.11 MessageQueueDirectorまたはebXML Message Serviceのインストール先の設定 	
 4.2.1 インストールの研知 4.2.2 タイプの選択 4.2.3 インストールの確認 4.2.4 Interstageのインストール先の設定 4.2.5 インストール機能の選択 4.2.6 JDKまたはJREの選択 4.2.7 JDKまたはJREのインストール先の設定 4.2.8 セキュリティ運用形態の選択 4.2.9 ポート番号の設定 4.2.10 メッセージマニュアルのインストール選択 4.2.11 MessageQueueDirectorまたはebXML Message Serviceのインストール先の設定 4.2.12 J2EE共通ディレクトリの作成先の設定 	
 4.2.1 インスト ルの研知 4.2.2 タイプの選択 4.2.3 インストールの確認 4.2.4 Interstageのインストール先の設定 4.2.5 インストール機能の選択 4.2.6 JDKまたはJREの選択 4.2.7 JDKまたはJREのプレストール先の設定 4.2.8 セキュリティ運用形態の選択 4.2.9 ポート番号の設定 4.2.10 メッセージマニュアルのインストール選択 4.2.11 MessageQueueDirectorまたはebXML Message Serviceのインストール先の設定 4.2.12 J2EE共通ディレクトリの作成先の設定 4.2.13 Java EE機能の認証情報の設定 	23 23 24 26 26 26 28 28 28 29 30 31 33 33 33 33 33 34 35
 4.2.1 インスト ルの研知 4.2.2 タイプの選択 4.2.3 インストールの確認 4.2.4 Interstageのインストール先の設定 4.2.5 インストール機能の選択 4.2.6 JDKまたはJREの選択 4.2.7 JDKまたはJREのプレストール先の設定 4.2.8 セキュリティ運用形態の選択 4.2.9 ポート番号の設定 4.2.10 メッセージマニュアルのインストール選択 4.2.11 MessageQueueDirectorまたはebXML Message Serviceのインストール先の設定 4.2.12 J2EE共通ディレクトリの作成先の設定 4.2.13 Java EE機能の認証情報の設定 4.2.14 Java EE機能のポート番号の設定 	23 23 24 26 26 28 28 29 30 30 31 33 33 33 34 35 36
 4.2.1 インストールの確認 4.2.2 タイプの選択 4.2.3 インストールの確認 4.2.4 Interstageのインストール先の設定 4.2.5 インストール機能の選択. 4.2.6 JDKまたはJREの選択 4.2.7 JDKまたはJREのプレストール先の設定 4.2.8 セキュリティ運用形態の選択. 4.2.9 ポート番号の設定 4.2.10 メッセージマニュアルのインストール選択 4.2.11 MessageQueueDirectorまたはebXML Message Serviceのインストール先の設定 4.2.13 Java EE機能の認証情報の設定. 4.2.15 Java EE機能のポート番号の設定. 4.2.15 Java EE機能で使用するJDKの選択. 	23 23 24 26 26 28 28 29 30 30 31 33 33 33 33 33 33 33 33 33 33 33 33
 4.2.1 インスト ルの用如 4.2.2 タイプの選択. 4.2.3 インストールの確認. 4.2.4 Interstageのインストール先の設定. 4.2.5 インストール機能の選択. 4.2.6 JDKまたはJREの選択. 4.2.7 JDKまたはJREのインストール先の設定. 4.2.8 セキュリティ運用形態の選択. 4.2.9 ポート番号の設定. 4.2.10 メッセージマニュアルのインストール選択. 4.2.11 MessageQueueDirectorまたはebXML Message Serviceのインストール先の設定. 4.2.12 J2EE共通ディレクトリの作成先の設定. 4.2.13 Java EE機能の認証情報の設定. 4.2.15 Java EE機能で使用するJDKの選択. 4.2.16 Java EE共通ディレクトリの作成先の設定. 	23 23 24 26 26 28 28 29 30 30 31 33 33 33 33 33 33 33 33 33 33 33 33
 4.2.1 インベド かの開始 4.2.2 タイプの選択. 4.2.3 インストールの確認. 4.2.4 Interstageのインストール先の設定. 4.2.5 インストール機能の選択. 4.2.6 JDKまたはJREの選択. 4.2.7 JDKまたはJREの選択. 4.2.7 JDKまたはJREのがシストール先の設定. 4.2.8 セキュリティ運用形態の選択. 4.2.9 ポート番号の設定. 4.2.10 メッセージマニュアルのインストール選択. 4.2.11 MessageQueueDirectorまたはbXML Message Serviceのインストール先の設定. 4.2.12 J2EE共通ディレクトリの作成先の設定. 4.2.13 Java EE機能の認証情報の設定. 4.2.15 Java EE機能で使用するJDKの選択. 4.2.16 Java EE共通ディレクトリの作成先の設定. 4.2.17 インストール. 	23 23 24 26 26 26 28 28 29 30 31 31 33 33 33 33 33 33 33 33 33 33 33
 4.2.1 インベド ルの研知 4.2.2 タイプの選択 4.2.3 インストールの確認 4.2.4 Interstageのインストール先の設定 4.2.5 インストール機能の選択 4.2.6 JDKまたはJREの選択 4.2.7 JDKまたはJREのインストール先の設定 4.2.8 セキュリティ運用形態の選択 4.2.9 ポート番号の設定 4.2.10 メッセージマニュアルのインストール選択 4.2.11 MessageQueueDirectorまたはebXML Message Serviceのインストール先の設定 4.2.12 J2EE共通ディレクトリの作成先の設定 4.2.13 Java EE機能の認証情報の設定 4.2.15 Java EE機能で使用するJDKの選択 4.2.16 Java EE機能で使用するJDKの選択 4.2.16 Java EE共通ディレクトリの作成先の設定 4.2.17 インストール 4.3 機能の追加と削除 	23 23 24 26 26 28 28 29 30 31 33 33 33 33 34 34 35 36 37 38 39 40
 4.2.1 インスト かの研想 4.2.2 タイプの選択 4.2.3 インストールの確認 4.2.4 Interstageのインストール先の設定 4.2.5 インストール機能の選択 4.2.6 IDKまたはIREの選択 4.2.7 IDKまたはIREのインストール先の設定 4.2.8 セキュリティ運用形態の選択. 4.2.9 ポート番号の設定. 4.2.10 メッセージマニュアルのインストール選択. 4.2.11 MessageQueueDirectorまたはebXML Message Serviceのインストール先の設定. 4.2.13 Java EE機能の認証情報の設定. 4.2.14 Java EE機能のポート番号の設定. 4.2.15 Java EE機能で使用するJDKの選択 4.2.16 Java EE共通ディレクトリの作成先の設定 4.2.17 インストール. 4.3 機能の追加と削除 4.3.1 注意事項 	23 23 24 26 26 28 28 29 30 30 31 33 33 33 34 33 33 34 35 36 37 38 39 40 40

4.3.1.2 ポート番号の設定に関する注意事項	
4.3.1.3 マルチサーバ管理機能を使用している場合	
4.3.1.4 J2EE機能をアンインストールする場合	
4.3.1.5 セキュア通信サービスをアンインストールする場合	
4.3.1.6 フレームワークをアンインストールする場合	41
4.3.1.7 Java EE機能をアンインストールする場合	41
4.3.2 インストール作業	
4.4 インストール後の作業	
4.5 インストール時のトラブル対処方法	
第5章特定の機能に関する注意事項	
5.1 マルチサーバ管理機能	
5.2 Webサーバ (Interstage HTTP Server)	
5.3 Fujitsu Enabler	
5.4 JDK/JRE	
5.5 MessageQueueDirector	
5.6 MQ連携サービス	55
5.7 フレームワーク	
	F7
竹録A Fujitsu XMLフロセッサのインストール	
付録B サイレントインストール	
付録C Interstage管理コンソールによるInterstage運用を安全にご利用いただくモデル	61
付録D Java監視機能のインストール	
D.1 インストール時に必要な環境	
D.2 Java監視機能のインストール	
D.3 注意事項	

第1章 インストール概要

Interstageのインストール概要について説明します。

1.1 サーバタイプ

Interstageのインストール時に指定するサーバタイプについて説明します。 サーバタイプには以下の3種類があります。

アプリケーションサーバ機能をインストール

Interstageのサーバ機能をインストールする場合に選択します。 また管理対象サーバとしてインストールする場合も本項目を選択します。

・ 管理サーバ機能をインストール

Interstageの管理サーバ機能をインストールする場合に選択します。 また複数のサーバを管理し、操作を行う場合も本項目を選択します。

・ Web Package機能をインストール

Web Package機能を選択する場合に選択します。 Web Package機能をインストールすることでWebサーバ環境を業務フロントシステム上に構築できます。

管理対象サーバや管理サーバ機能については、"運用ガイド(基本編)"の"マルチサーバ管理機能"を参照してください。

またWeb Package機能によるWebサーバ環境の構築については、オンラインマニュアルのナビゲータから[運用]>[Webサーバの運用] を参照してください。

1.2 アプリケーションサーバ機能のインストール

アプリケーションサーバ機能をインストールする場合、インストールタイプを選択することができます。 インストールタイプには、以下の2種類があります。

• 標準インストール

Interstageの標準的な機能を使用し、簡易にインストールを行いたい場合に選択します。

カスタムインストール
 使用する機能を最小セットでインストールする場合に選択します。

Interstageを利用するために必要な環境設定は、Interstageのインストール時に自動的にセットアップされます。 インストールが終了した後は、Interstage管理コンソールによって、簡易な操作で運用が行えます。

なお標準またはカスタムインストールでインストールした機能の選択状態の変更は"1.5機能の追加と削除"で行います。



Interstageインストール時のセットアップでは、システム規模がlargeで設定されます。システム規模の変更を行う場合は、"運用ガイド(基 本編)"を参照して変更してください。

1.2.1 標準インストール

標準インストールで使用できる機能は以下のとおりです。

Interstage Application Server Enterprise Editionの標準インストールで使用できる機能

機能	説明
Interstage Application Serverの基本機能	Interstage Application Serverに必要な基本機能
J2EE	Servletサービス/Interstage EJBサービス
	Interstage JMSサービス
Webサーバ(Interstage HTTP Server)	Apache2.0ベースのWebサーバであるInterstage HTTP Server
Interstage管理コンソール	Interstage管理コンソール
セキュア通信サービス	証明書・鍵管理機能、およびSSL通信機能
データベース連携サービス	データベース連携サービス
非同期通信	イベントサービス
オプション機能	Portable-ORB
	CORBAサービスディベロップメントツール
	Enabler Server
Interstage ディレクトリサービス	Interstageの各サービスから使用できる、LDAPをベースとし たディレクトリサービス機能
サンプルアプリケーション	Interstageのサンプル
JDK 5.0	JDKバージョン5.0
フレームワーク	フレームワーク



• Interstage Application Server Enterprise Editionでは、上記に示す機能の基盤として動作するために以下の機能が暗黙的にインストールされます。

.....

- CORBAサービス(IIOP通信基盤)
- コンポーネントトランザクションサービス(アプリケーション運用管理基盤)
- Interstage JMXサービス

CORBAサービスおよびコンポーネントトランザクションサービスはEJBおよびServletを利用する場合に必要な基盤機能です。Interstage を起動すると、これらのサービスは起動します。

- ・Servletサービスのインストール後に、IJServerワークユニットが作成されます。
- ・ Fujitsu XMLプロセッサについては、本ソフトウェアからはインストールされません。使用する場合は、"付録A Fujitsu XMLプロセッサのインストール"を参照してください。

1.2.2 カスタムインストール

カスタムインストールは以下の場合に使用します。

- ・ 使用する機能を最小セットでインストールする場合
- ・ JRE 5.0または異なるバージョンのJDK/JREをインストールする場合

なお、Windows Server 2003 x64 Editions、およびWindows Server 2008にインストールする場合、インストールすることができない機能 があります。詳細は"3.2 Windows Server 2003 x64 Editionsにインストールするとき"または"3.3 Windows Server 2008にインストールす るとき"を参照してください。

カスタムインストールで選択可能な機能は以下のとおりです。

	機能	説明	インストール時のデフォルト 状態でのインストール有無
Interstage App	lication Serverの基本機能	Interstage Application Serverに必要な基本 機能	必須機能のため、必ずイン ストールされます。
J2EE	Servletサービス/ Interstage EJBサービス	Tomcat5.5ベースのServletサービスと Interstage EJBサービスです。 注) Interstage Webサービスを利用する場合 は、本機能をインストールしてください。	インストール Servletサービスのインストー ル後に、IJServerワークユ ニットが作成されます。
	Interstage JMS	分散オブジェクト環境におけるJ2EE準拠の 非同期通信機能です。	インストール
Java EE		GlassFish v2.1ベースのJava EE機能です。	インストールせず
Webサーバ(In	terstage HTTP Server)	Apache2.0ベースのWebサーバである Interstage HTTP Serverです。	インストール
Interstage管理	コンソール	GUIによるInterstageの環境構築/運用操作/ 運用監視を提供する機能です。	インストール
セキュア通信サ	ナービス	セキュア通信サービス機能	インストール
データベース	重携サービス	データベース連携サービス	インストール
非同期通信	イベントサービス	アプリケーションプログラム間の通信をオブ ジェクトで非同期に行う機能です。	インストール
	MessageQueueDirector	メッセージキューを基盤とした非同期通信 機能です。	インストールせず
ebXML Messa	ge Service	ebXML Message Service	インストールせず
オプション機 能	Portable-ORB	Javaクライアントの実行時にWebサーバから Javaランタイムをダウンロードして実行環境 を構築するサービスです。	インストール
	CORBAサービスディベ ロップメントツール	CORBAアプリケーション開発用のツールで す。	インストール
	Enabler Server	Interstageディレクトリサービスを使用する場合に選択します。	インストール

Interstage Application Server Enterprise Editionのカスタムインストールで選択可能な機能

機能		説明	インストール時のデフォルト 状態でのインストール有無	
シングル・サイ ンオン	Interstageシングル・サイ ンオン(業務サーバ)	Webベースのサービスに対応するアクセス 制御を提供するサーバです。	インストールせず	
	Interstageシングル・サイ ンオン(認証サーバ)	ユーザID/パスワード、証明書をもとに利用 者の認証を行うサーバです。	インストールせず	
	Interstageシングル・サイ ンオン(リポジトリサーバ)	利用者の認証に必要な情報とWebサーバ のサービスに対応するアクセス制御に必要 な情報を管理するサーバです。	インストールせず	
UDDIクライアン	个	UDDIクライアントサービス	インストールせず	
UDDIレジストリ	サービス	UDDIレジストリサービス	インストールせず	
Interstage ディレ	·クトリサービス	Interstageの各サービスから、LDAPをベー スとしたディレクトリサービス機能を使用する 場合に選択します。	インストール	
Application Serverの互換 機能	Tomcat 4.1ベースの Servlet	Tomcat4.1ベースのServletサービスを使用 する場合に選択します。 本バージョンではTomcat5.5ベースのServlet サービスの使用を推奨します。	インストールせず	
	SOAPサービス	SOAPサービス	インストールせず	
サンプルアプリ	ケーション	Interstageのサンプル	インストール	
JDK/JRE	5.0	JDKまたはJREのバージョン5.0	インストール	
	6	JDKまたはJREのバージョン6	インストールせず	
	1.4	JDKまたはJREのバージョン1.4	インストールせず	
フレームワーク		フレームワーク	インストール	



Fujitsu XMLプロセッサについては、本ソフトウェアからはインストールされません。使用する場合は、"付録A Fujitsu XMLプロセッサのインストール"を参照してください。

1.3 管理サーバ機能のインストール

サーバタイプとして「管理サーバ機能をインストール」を選択した場合、以下の機能がインストールされます。

機能	説明
Interstage Application Serverの基本機能	Interstage Application Serverに必要な基本機能
Webサーバ(Interstage HTTP Server)	Apache2.0ベースのWebサーバであるInterstage HTTP Server
Interstage管理コンソール	GUIによるInterstageの環境構築/運用操作/運用監視を提供する機能
セキュア通信サービス	証明書・鍵管理機能、およびSSL通信機能
オプション機能	Enabler Server

機能	説明
Interstage ディレクトリサービス	Interstageの各サービスから使用できる、LDAPをベースとしたディレクトリサービス機能
JDK 5.0	JDKバージョン5.0



管理サーバ機能では、上記に示す機能の基盤として動作するために以下の機能が暗黙的にインストールされます。

- Interstage JMXサービス
- Interstage管理コンソール用Servletサービス

1.4 Web Package機能のインストール

サーバタイプとして「Web Package機能をインストール」を選択した場合、以下の機能がインストールされます。

機能	説明
Interstage Application Serverの基本機能	Interstage Application Serverの基本機能
Tomcat 5.5ベースのServlet	Webサーバコネクタとして使用
Webサーバ(Interstage HTTP Server)	Apache2.0ベースのWebサーバであるInterstage HTTP Server
JRE 5.0	JREバージョン5.0



Web Package機能では、上記に示す機能以外に以下の機能が暗黙的にインストールされます。

- J2EE
- EJB
- Interstage管理コンソール
- Interstage JMXサービス
- Interstage管理コンソール用Servletサービス
- セキュア通信サービス
- Webコネクタ故障監視機能

1.5 機能の追加と削除

"機能の追加と削除"は、現在インストールされている機能に対して機能の追加、または削除を行う(インストール機能の選択状態の変 更)機能です。

なおマルチサーバ管理機能を使用している場合、管理サーバおよび管理対象サーバに対してインストール機能の選択状態は変更できません。管理対象サーバに対してインストール機能の選択状態を変更する場合は、サイトから削除した後に行ってください。



.....

- ・ インストール機能の選択状態を変更する前に、Interstageの資源のバックアップを採取しておくことをお勧めします。バックアップについては、"運用ガイド(基本編)"を参照してください。
- ・ 資源の移行方法については"移行ガイド"を参照してください。

1.6 Interstageのサービス

Interstageをインストールすると登録されるサービスの役割について説明します。

Interstage Application Server Enterprise Editionのサービス

サービス名	説明
INTERSTAGE	Interstageの運用管理機能を提供するサービスです。
INTERSTAGE API	MSCSを利用してクラスタシステムを使用する場合に、Interstageの運用管理機能を提供するサービスです。(注1)
OD_start	分散オブジェクト環境においてプラットフォームに依存しないアプリ ケーション間の相互連携を実現するサービスです。
InterfaceRep_Cache Service	オブジェクトのインタフェース情報を一括して管理する、インタフェー スリポジトリサービスです。アプリケーションの連携時に、動的なイン タフェース情報を提供します。Interstageを運用するために必要な サービスです。
InterfaceRep_Cache_e Service	オブジェクトのインタフェース情報を一括して管理する、EJBサービ ス用のインタフェースリポジトリサービスです。EJBアプリケーションを 配備する場合に必要なサービスです。
Naming Service	オブジェクトリファレンスを論理的な名前と関連付けて管理する、ネー ミングサービスです。
EventFactory (注2)	イベントサービスにおいて、動的にイベントチャネルを生成するため に必要なサービスです。Interstage JMSでQueueRequestor、 TemporaryQueue、TemporaryTopic、またはTopicRequestorを使用 する場合に必要なサービスです。
EventService (注2)	分散アプリケーション間の通信を非同期に行う機能を提供するサービスです。Interstage JMSを使用する場合に必要なサービスです。
FJapache	Interstage HTTP Server(Apache 2.0.59をベースとしたWebサーバ)の サービスです。Webサーバを使用する場合に必要なサービスです。
Interstage Directory Service (注3)	Interstage ディレクトリサービス(LDAPをベースとしたディレクトリサービス)のサービスです。
Interstage JServlet(OperationManagement)	Interstage管理コンソール用のServletサービスです。Interstage管理 コンソールを使用するには本サービスが動作している必要がありま す。
Interstage Operation Tool	Interstage管理コンソールの実行環境を提供するサービスです。本 サービスを起動することで以下のサービスが連動して起動されま す。 ・Interstage JServlet(OperationManagement) ・Interstage Operation Tool(FJapache)

サービス名	説明
Interstage Operation Tool(FJapache)	Interstage管理コンソールが使用するInterstage HTTP Serverを提供 するサービスです。
ObjectTransactionService	グローバルトランザクションを提供するサービスです。OTSおよびJTS を使用する場合に必要です。
TransactionDirector	アプリケーションの実行環境を提供するサービスです。IJServerを使用する場合に必要なサービスです。
CORBA/SOAP ClientGW (注4)	CORBAクライアントアプリケーションがWebサービス(RPC)サーバア プリケーションと連携するために必要なサービスです。
Fujitsu Enabler	Interstageのリポジトリ機能を提供するサービスです。Interstage ディレクトリサービスを使用する場合に必要なサービスです。
Interstage Server Monitor Service	InterstageのWebサーバコネクタ用のサーバ故障監視サービスを提供します。
Interstage Server Monitor Service(Cache Manager)	InterstageのWebサーバコネクタ用のサーバ故障監視サービスを提供します。(キャッシュ管理)
Interstage Java EE DAS	Java EE機能の運用管理を行うサービスです。Interstage Java EE 管理コンソール、asadminコマンドからの運用操作依頼を受け付けます。
Interstage Java EE Node Agent	Java EE機能のサーバーインスタンスの管理を行うサービスです。 サーバーインスタンスの起動・停止、監視を行います。
Message Queue 4.1 Broker (注5)	Java EEで規定されているJMSの非同期通信環境を提供するサービスです。

注1) MSCSとはMicrosoft Corporationのクラスタシステムとして使用されているMicrosoft(R) Cluster Serverのことです。

注2) 本サービスは、以下の操作を行うとサービスとして登録されます。

- ・ Interstage管理コンソールを使用し、Interstage構成サービスとしてイベントサービスを登録する
- ・ isinit/essetupコマンドを使用し、イベントサービスのセットアップを行う

注3) 本サービスは、以下の操作を行うとサービスとして登録されます。

・ Interstage管理コンソールを使用し、リポジトリを作成する

注4) 本サービスは、発行元が不明なサービスとして登録されます。

注5) 本サービスはimqsvcadminコマンドを使用した場合に、サービスとして登録されます。

第2章 インストール条件

Interstageのインストール条件について説明します。

2.1 動作基本ソフトウェア

本ソフトウェアを使用する場合、次の基本ソフトウェアが必要です。

項番	基本ソフトウェア名	備考
1	Microsoft(R) Windows(R) 2000 Server	(注1)
2	Microsoft(R) Windows(R) 2000 Advanced Server	(注1)
3	Microsoft(R) Windows Server® 2003, Standard Edition	
4	Microsoft(R) Windows Server® 2003, Enterprise Edition	
5	Microsoft(R) Windows Server® 2003, Standard x64 Edition	
6	Microsoft(R) Windows Server® 2003, Enterprise x64 Edition	
7	Microsoft(R) Windows Server® 2003 R2, Standard Edition	
8	Microsoft(R) Windows Server® 2003 R2, Enterprise Edition	
9	Microsoft(R) Windows Server® 2003 R2, Standard x64 Edition	
10	Microsoft(R) Windows Server® 2003 R2, Enterprise x64 Edition	
11	Microsoft(R) Windows Server® 2008 Standard	(注2)
12	Microsoft(R) Windows Server® 2008 Enterprise	(注2)
13	Microsoft(R) Windows Server® 2008 Datacenter (x64版のみ)	(注2,3)
14	Microsoft(R) Windows Server® 2008 Standard without Hyper-V	(注2)
15	Microsoft(R) Windows Server® 2008 Enterprise without Hyper-V	(注2)
16	Microsoft(R) Windows Server® 2008 Datacenter without Hyper-V	(注2)
17	Microsoft(R) Windows Server® 2008 Foundation	(注2)
18	Microsoft(R) Windows Server® 2008 R2 Standard	(注2)
19	Microsoft(R) Windows Server® 2008 R2 Enterprise	(注2)
20	Microsoft(R) Windows Server® 2008 R2 Datacenter (x64版のみ)	(注2,3)
21	Microsoft(R) Windows Server® 2008 R2 Foundation	(注2)

注1) Service Pack4以上を適用してください。

注2) Server Core インストールでのInterstageの運用はサポートしていません。

注3)「Microsoft(R) Windows Server® 2008 Datacenter」については、x64版のみInterstageの運用をサポートしています。



 アプリケーション開発時およびアプリケーション実行時に必要なソフトウェアについては、"使用上の注意"の"ソフトウェア条件"を 参照してください。

・ 64bit版Windowsにインストールした場合、32ビットアプリケーションとして動作します。

2.2 排他ソフトウェア

本ソフトウェアを使用する場合、以下の製品を同一オペレーティング・システムにインストールしないでください。

Interstage

項番	製品名	バージョン・レベル	備考
1	Interstage Application Server (注1)	V1.0以降	(注3)
2	Interstage Web Server	V9.0以降	
3	Interstage Business Application Manager	V1.0L10 V1.0L20 V1.0L21 V2.0.0	
4	Interstage Security Director (注2)	V3.0以降	
5	Interstage Apworks	V6.0以降	
6	Interstage Studio	V9.0以降	
7	INTERSTAGE WEBCOORDINATOR	V4.0以降	
8	Interstage Apcoordinator	V5.0以降	
9	Interstage Business Application Server	V8.0以降	
10	Interstage Application Framework Suite	V6.0以降	

注1) Interstage Application Serverは、バージョン・レベルによっては、次のように製品表記されています。

·INTERSTAGE (V2.x以前)

・INTERSTAGE Application Server (V4.x以前)

注2) Interstage Application ServerのCORBAサービス(ObjectDirector)とInterstage Security DirectorのIIOPアプリケーションゲートウェイ 機能に含まれるCORBAサービス(ObjectDirector)は排他ソフトウェアです。

注3) バージョン・レベルやエディションに関わらず、同一オペレーティング・システムに複数インストールすることはできません。

Systemwalker

項番	製品名	バージョン・レベル
1	Systemwalker CentricMGR (運用管理クライアント)	V5.0以降
2	Systemwalker CentricMGR (運用管理サーバ)(注)	V5.0以降
3	Systemwalker Centric Manager (運用管理クライアント)	V11.0以降
4	Systemwalker Centric Manager (運用管理サーバ)(注)	V11.0以降
5	Systemwalker PKI Manager	V12.0L10
6	SystemWalker/PkiMGR	V10.0L20

注) Web Package機能をインストールする場合は排他ソフトウェアです。

その他

項番	製品名	バージョン・レベル
1	InfoProxy for Middleware	V1.0以降
2	ObjectDirector for Windows NT	V3.0以降
3	Securecryptoライブラリ Securecryptoライブラリランタイム for 暗号プロセッサ (注)	V1.0L40

項番	製品名	バージョン・レベル
4	InfoCA	V1.0L10
5	PKI Manager	V1.0L10
6	Enterprise PKI Manager	V1.0L10

注) アプリケーションで楕円曲線暗号(ECC)を使用している場合が該当します。

2.3 必要な修正プログラム

本ソフトウェアを使用する場合、以下の修正プログラムの適用が必要です。

項番	製品名	修正プログラム	備考
1	Symfoware Server	(注)	左記製品と連携する場合に 必要
2	Symfoware Server Standard Edition	(注)	左記製品と連携する場合に 必要
3	Symfoware Server Enterprise Edition	(注)	左記製品と連携する場合に 必要

注) 各バージョンの最新の修正プログラムを適用してください。

オペレーティング・システムの信頼性を保証するためにも最新の修正プログラムを適用してください。

2.4 必要なパッケージ

本製品を使用する場合、以下のパッケージの適用が必要です。

項番	修正プログラム	備考
1	Microsoft Visual C++ 2005 SP1 再頒布可能 パッケージ (x86)	左記パッケージは、本製品インストール時にインストールされます。
		ンストールされている必要があります。

2.5 インストール時に必要なディスク容量

インストール時に必要なディスク容量は次のとおりです。

Interstage Application Server Enterprise Editionのインストール時に必要なディスク容量

項番	機能	ディスク容量(単位Mバイト)
1	Interstageのインストールフォルダ	1430
2	システムドライブ	120
	合計	1550

・ 上記以外に、作業域として以下のディスク容量が必要です。

フォルダ	ディスク容量(単位Mバイト)
環境変数TEMPに指定したフォルダ	50

- ・ "4.2 新規インストール"、および"4.3 機能の追加と削除"で表示される画面で、インストールに必要なディスク容量が1Mバイト異なって表示される場合がありますが、本ソフトウェアのインストールには問題ありません。
- ・ JDK/JREをInterstageのインストールフォルダとは別ドライブにインストールする場合、それぞれ以下のディスク容量が必要になります。

JDK/JRE	ディスク容量(単位Mバイト)
JDK 1.4	200
JRE 1.4	100
JDK 5.0	232
JRE 5.0	119
JDK 6	320
JRE 6	135

<u>2.6 メ</u>モリ容量

本ソフトウェアを動作させるために必要なメモリ容量については、"チューニングガイド"の"必要資源"ー"メモリ容量"を参照してください。

第3章 インストール時の注意事項

本ソフトウェアをインストールする際の注意事項について説明します。

3.1 移行上の注意

以前のバージョンから本ソフトウェアに移行する場合の注意事項については、オンラインマニュアルの"移行ガイド"を参照してください。

なおフレームワークの移行に関する注意事項については、オンラインマニュアルの"Apcoordinatorユーザーズガイド"を参照してください。

3.2 Windows Server 2003 x64 Editionsにインストールするとき

Windows Server 2003 x64 Editionsにインストールする場合、以下の機能をインストールすることはできません。

・ UDDIレジストリサービス

3.3 Windows Server 2008にインストールするとき

Windows Server 2008にインストールする場合、以下の機能をインストールすることはできません。

- JDK/JRE 1.4
- Tomcat4.1ベースのServlet
- ・ UDDIクライアント
- ・ UDDIレジストリサービス

Windows Server 2008にインストールする場合、以下の機能はEnterprise Editionで提供されるebXML Message Service以外から利用できません。

• SOAPサービス

3.4 Systemwalker Centric Managerを導入するとき

Interstage に含まれている CORBA サービス (ObjectDirector) は、Systemwalker Centric Manager (SystemWalker/CentricMGR、Systemwalker CentricMGRおよびSystemwalker Centric ManagerをSystemwalker Centric Managerと表記して説明します。なおVLを表記している場合は当該製品名を記載します)にも含まれているため、Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバとInterstageを同一コンピュータに導入する場合には注意が必要です。

ここでは、以下の作業について説明します。

- ・ インストールについて
- Interstageの再初期化について

Systemwalker Centric Managerの環境設定やコマンド等の詳細については、Systemwalker Centric Managerのマニュアルを参照してください。

なお本注意事項は、Systemwalker Centric Manager 運用管理サーバのみが対象であり、Systemwalker Centric Manager エージェント の導入に関しては対象外です。 InterstageとSystemwalkerを同一システムにインストールする場合は同じオペレーティング・システムの製品でのみ使用可能です。

"運用環境保守ウィザード"について

"運用環境保守ウィザード"は、以下の[スタート]メニューからアプリケーションを起動してください。

- ・ V11.0L10以降の場合 [スタート] > [プログラム] > [Systemwalker Centric Manager] > [ツール] > [運用環境の保守]
- V10.0L2xの場合
 [スタート] > [プログラム] > [Systemwalker CentricMGR] > [環境設定] > [運用環境保守ウィザード]

Systemwalker Centric Managerのパッチについて

Systemwalker Centric Manager 運用管理サーバとInterstageを同一コンピュータに導入する場合、以下のSystemwalker Centric Manager のパッチを適用する必要があります。

Systemwalker Centric Manager 運用管理サーバをインストール後、Systemwalker Centric Managerの環境の作成または復元を行う間までに適用してください。

- ・ SystemWalker/CentricMGR V10.0L10を使用する場合は、修正番号TP06255を適用してください。
- ・ Systemwalker CentricMGR V10.0L20を使用する場合は、修正番号TP06254を適用してください。
- ・ Systemwalker CentricMGR V10.0L21を使用する場合は、修正番号TP06210を適用してください。
- SystemWalker/CentricMGR V5.0Lxxについては未定です。



マルチサーバ管理機能を使用している場合は、以下のサーバ種別を推奨します。

- 管理サーバ
- ・ スタンドアロンサーバ

ここでは、アプリケーションサーバ機能のインストールの場合について記載しています。管理サーバ機能のインストールの場合はその ままインストールすることができます。

3.4.1 InterstageがインストールされているコンピュータにSystemwalker Centric Managerの運用管理サーバをインストールするとき

以下の手順で、Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバをインストールします。

なおInterstageが管理サーバの場合は、Systemwalkerのマニュアルを参照してインストールしてください。

1.Interstageの停止とSystemwalker Centric Managerのインストール

- 1. -fオプション(強制停止)を指定したisstopコマンド、もしくはInterstage管理コンソールを使用してInterstageを停止します。 C:¥> isstop -f
- 2. Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバをインストールします。



SystemWalker/CentricMGR V5.0L10~V10.0L10の場合、インストール直後およびコンピュータの再起動直後に環境作成実行 確認画面が表示されますが、環境作成を行わないでください。

- 3. コンピュータを再起動します。
- 4. 再度、1.を実行し、Interstageを停止します。

2.Systemwalker Centric Managerの環境作成と起動



ネーミングサービス環境をローカルシステム上に作成している場合は、すでにObjectDirector環境が構築されているため、ObjectDirector 環境の再構築を行わないでください。詳細は、Systemwalker CentricMGR V10.0L20以降で提供されている"Systemwalker Centric Manager Interstage,Symfoware,ObjectDirectorとの共存ガイド"を参照してください。

.

Systemwalker CentricMGR V10.0L20以降および、Systemwalker Centric Manager V11.0L10以降の場合

- 1. "運用環境保守ウィザード"を起動します。
- 2. "運用環境の構築"を選択し、Systemwalker Centric Managerの環境を作成します。
- 3. 以下のコマンドを実行し、Systemwalker Centric Managerのサービスを起動します。

C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥bin¥scentricmgr

SystemWalker/CentricMGR V5.0L10~V10.0L10の場合

- 1. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10~V5.0L20の場合、システム環境変数"INS_NAME=no"を設定します。
- 2. 以下のセットアップコマンド(-mixオプション指定)を実行します。

C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥MpFwbs¥bin¥MpFwSetup -mix

初期画面で"Systemwalker Centric Manager 環境作成"ボタンをクリックし、環境を作成します。

- 3. 以下のコマンドを実行し、Systemwalker Centric Managerのサービスを起動します。
 - Systemwalker CentricMGR V5.0L10の場合
 - C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥mpcmtool¥service¥bin¥scentricmgr
 - Systemwalker CentricMGR V5.0L20~V10.L10の場合
 - C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥bin¥scentricmgr
- 4. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10~V5.0L20の場合、システム環境変数"INS_NAME=no"を削除します。

3.Interstageの起動

1. isstartコマンドもしくはInterstage管理コンソールを使用してInterstageを起動します。

C: is start

3.4.2 Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバがインストールされているコンピュータにInterstageをインストールするとき

以下の手順で、Interstageをインストールします。

なおInterstageが管理サーバの場合は、Systemwalkerのマニュアルを参照してインストールしてください。

1.Systemwalker Centric Managerの停止と環境削除

Systemwalker CentricMGR V10.0L20以降および、Systemwalker Centric Manager V11.0L10以降の場合

- 1. Systemwalker Centric Managerのすべての機能を停止します。
 - C: $\}>$ [Systemwalkerインストールパス] $\}MPWALKER.DM$ binpcentricmgr
- 2. "運用環境保守ウィザード"を起動します。
- 3. "運用環境の退避"を選択し、Systemwalker Centric Managerの環境をバックアップします。
- 4. "運用環境の削除"を選択し、Systemwalker Centric Managerの環境を削除します。

SystemWalker/CentricMGR V5.0L10~V10.0L10の場合

- 1. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10~V5.0L20の場合、システム環境変数"INS_NAME=no"を設定します。
- 2. Systemwalker Centric Managerのすべての機能を停止します。
 - Systemwalker CentricMGR V5.0L10の場合
 - C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥mpcmtool¥service¥bin¥pcentricmgr
 - Systemwalker CentricMGR V5.0L20~V10.L10の場合
 - C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥bin¥pcentricmgr
- 3. 以下のコマンドを実行し、Systemwalker Centric Managerの環境をバックアップします。

C: ¥> [Systemwalkerインストールパス] ¥MPWALKER.DM ¥mpcmtool ¥backup ¥bin ¥mpbkc バックアップデータ格納先フォルダ

- 4. 再度、2.を実行し、Systemwalker Centric Managerのすべての機能を停止します。
- 5. 以下のセットアップコマンドを実行します。

C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥MpFwbs¥bin¥MpFwSetup

初期画面で"Systemwalker Centric Manager環境削除"ボタンをクリックし、環境を削除します。

6. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10~V5.0L20の場合、システム環境変数"INS_NAME=no"を削除します。

2.ObjectDirectorのアンインストール

- Systemwalker Centric ManagerでインストールされたObjectDirectorをアンインストールします。
 [コントロールパネル]>[管理ツール]>[サービス]で"OD_start"サービスを停止します。
 [コントロールパネル]>[アプリケーションの追加と削除]で"ObjectDirector Server"をアンインストールします。
- 2. コンピュータを再起動します。
- 3. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10~V5.0L20の場合、システム環境変数"INS_NAME=no"を設定します。
- 4. Systemwalker Centric Managerのすべての機能を停止します。
 - Systemwalker CentricMGR V5.0L10の場合

C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥mpcmtool¥service¥bin¥pcentricmgr

- 上記以外の場合

C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥bin¥pcentricmgr

5. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10~V5.0L20の場合、システム環境変数"INS_NAME=no"を削除します。

3.Interstageのインストールと停止

- 1. Interstageをインストールします。
- 2. コンピュータを再起動します。
- 3. -fオプション(強制停止)を指定したisstopコマンド、もしくはInterstage管理コンソールを使用してInterstageを停止します。 C:¥> isstop -f

4.Systemwalker Centric Managerの環境復元と起動



ネーミングサービス環境をローカルシステム上に作成している場合は、すでにObjectDirector環境が構築されているため、ObjectDirector 環境の再構築を行わないでください。詳細は、Systemwalker CentricMGR V10.0L20以降で提供されている"Systemwalker Centric Manager Interstage,Symfoware,ObjectDirectorとの共存ガイド"を参照してください。

Systemwalker CentricMGR V10.0L20以降および、Systemwalker Centric Manager V11.0L10以降の場合

- 1. "運用環境保守ウィザード"を起動します。
- 2. Systemwalker Centric Managerの環境を作成または復元します。
 - Systemwalker Centric Managerの環境を作成する場合は、"運用環境の構築"を選択します。
 - Systemwalker Centric Managerの環境を復元する場合は、"運用環境の復元"を選択します。
- 3. 以下のコマンドを実行し、Systemwalker Centric Managerのサービスを起動します。
 - C: $\}>$ [Systemwalkerインストールパス] $\}MPWALKER.DM$ $\}bin$ $\}scentricmgr$

SystemWalker/CentricMGR V5.0L10~V10.0L10の場合

- 1. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10~V5.0L20の場合、システム環境変数"INS_NAME=no"を設定します。
- 2. 以下のセットアップコマンド(-mixオプション指定)を実行します。

C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥MpFwbs¥bin¥MpFwSetup -mix

初期画面で"Systemwalker Centric Manager 環境作成"ボタンをクリックし、環境を作成します。

3. 以下のコマンドを実行し、復元の準備をします。

C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥mpfwbs¥bin¥premprs バックアップデータ格納フォルダ

4. 以下のコマンドを実行し、Systemwalker Centric Managerの環境をリストアします。リストア作業の詳細は、Systemwalker Centric Managerのマニュアルを参照してください。

C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥mpcmtool¥backup¥bin¥mprsc バックアップデータ格納フォルダ

- 5. 以下のコマンドを実行し、Systemwalker Centric Managerのサービスを起動します。
 - Systemwalker CentricMGR V5.0L10の場合

C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥mpcmtool¥service¥bin¥scentricmgr

- Systemwalker CentricMGR V5.0L20~V10.0L10の場合
 - C: $\mathbb{Y}>$ [Systemwalkerインストールパス] \mathbb{Y} MPWALKER.DM \mathbb{Y} bin \mathbb{Y} scentricmgr
- 6. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10~V5.0L20の場合、システム環境変数"INS_NAME=no"を削除します。

5.Interstageの起動

1. isstartコマンドもしくはInterstage管理コンソールを使用してInterstageを起動します。

C:¥> isstart

3.4.3 Interstageを再初期化する

以下の場合、Interstageを再初期化する必要があります。なお対象となるInterstageはアプリケーションサーバ機能です。

・ InterstageとSystemwalker Centric Managerの運用管理サーバを同一サーバ上にセットアップしている

1.Systemwalker Centric Managerの停止と環境削除

"3.4.2 Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバがインストールされているコンピュータにInterstageをインストールするとき"の"1.Systemwalker Centric Managerの停止と環境削除"を参照して、Systemwalker Centric Managerを停止し、環境を削除します。

2.Interstageの再初期化と停止

- 1. Interstageを再初期化します。
- 2. -fオプション(強制停止)を指定したisstopコマンド、もしくはInterstage管理コンソールを使用してInterstageを停止します。

3.Systemwalker Centric Managerの環境復元と起動

"3.4.2 Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバがインストールされているコンピュータにInterstageをインストールするとき" の"4.Systemwalker Centric Managerの環境復元と起動"を参照して、Systemwalker Centric Managerの環境を復元し、起動します。

4.Interstageの起動

1. isstartコマンドもしくはInterstage管理コンソールを使用してInterstageを起動します。

C:¥> isstart

3.5 Systemwalker/PkiMGR、InfoCA、COMMERCESTAGEがインス トールされているときの注意事項

Interstageのサーバ機能をインストールすると、アプリケーションサーバの基本機能として、コンポーネントトランザクションサービスがインストールされます。コンポーネントトランザクションサービスには、サービスを構成する機能の一つとしてEXTPが含まれています。 EXTPは以下の製品からも使用されるため、以下の製品とInterstageを同一コンピュータ上で運用する場合は注意が必要です。

- COMMERCESTAGE
- InfoCA

• Systemwalker/PkiMGR

上記製品とInterstageを同一コンピュータ上で運用する場合、以下の手順でインストールしてください。

- EXTPを使用する他製品のインストール Interstageをインストールする前に、上記のEXTPを使用する他製品をインストールしてください。インストール方法については、各 製品のソフトウェア説明書を参照してください。
- 2. 製品ごとの環境削除および環境再構築の実施 "EXTPの移行方法"を参照して、EXTP環境を移行してください。

EXTPの移行方法

EXTP環境(EXTPの実行環境)は、以下の手順で移行します。

1. EXTPを使用する各製品の停止

EXTPを使用している各製品を停止してください。停止方法については各製品のマニュアルを参照してください。

2. 各製品の環境の削除

既存環境が存在する場合には、csunsetupコマンドを実行し、業務システムをアンセットアップしてください。



.....

3. EXTPパッケージのアンインストール

EXTPパッケージをアンインストールしてください。アンインストール方法については、各製品のマニュアルを参照してください。

4. EXTPインストール環境の削除

下記フォルダおよびフォルダ配下のファイルを削除してください。

- 2.でアンセットアップした環境のフォルダおよびフォルダ配下に残っているファイル
- 3.でアンインストールしたEXTPインストール先フォルダ配下に残っているファイル

🌀 注意

ユーザ作成資源が、EXTPインストール先フォルダまたはセットアップ先フォルダ配下に作成されている場合は、その資源をバッ クアップしてから実施してください。

5. Interstageのインストール

Interstageをインストールしてください。

6. 各製品の環境の再作成

製品ごとに、以下の手順で環境を再作成します。

1. 環境の作成 cssetupコマンドを実行し、EXTP環境をセットアップしてください。



3.6 Windows Defenderが有効になっているときの注意事項

Windows Defenderが有効になっている場合、Interstageのサーバ機能をインストールすると、Windows Defenderの履歴およびイベント ビューアのシステムログに、以下のWindows Defenderからのメッセージが出力されることがあります。

これは、Windows Defenderのリアルタイム保護エージェントがサービスのソフトウェアの登録を監視しているためで、そのまま使用して 問題ありません。

また、インストール中、Windows Defenderのアイコンがタスクバーの通知領域に表示されることがあります。この場合、Windows Defender を開き、"コンピュータの設定に対する変更を確認する"の画面で、[操作を適用する]をクリックしてください。

Windows Defenderの履歴のメッセージ

日本語

このプログラムは、望ましくない動作をする可能性があります。

英語

This program has potentially unwanted behavior.

イベントビューアのシステムログ

日本語

Windows Defender リアルタイム保護エージェントで、変更が検出されました。これらの変 更を行ったソフトウェアに潜在的リスクがないか分析することをお勧めします。これらのプロ グラムの動作方法に関する情報を使用して、これらのプログラムの実行を許可するか、コ ンピュータから削除するかを選択できます。プログラムまたはソフトウェア発行者を信頼で きる場合のみ、変更を許可してください。Windows Defender は許可された変更を元に戻 せません。

英語

Windows Defender Real-Time Protection agent has detected changes. Microsoft recommends you analyze the software that made these changes for potential risks. You can use information about how these programs operate to choose whether to allow them to run

3.7 暗号化属性のフォルダにインストールするとき

暗号化属性が設定されたフォルダにInterstageのサーバパッケージをインストールするとInterstageのサービスは起動できなくなります。

暗号化属性が設定されていないフォルダにインストールするか、暗号化属性を解除してください。

第4章 インストール作業

Interstageのインストール作業について説明します。

4.1 インストール前に必須な作業

本ソフトウェアをインストールする前に、必ず、以下の作業を行ってください。

- 1. インストールの可否の確認
- 2. アプリケーションの停止
- 3. 環境の確認
- 4. 必要なソフトウェアのインストール
- 5. ソフトウェアのアンインストール
- 6. ターミナルサービスのモード変更

インストールの可否の確認

- ・ "第2章 インストール条件"を参照して、インストール可能な状態であるか確認してください。
- ・Interstageのクライアント機能がインストールされている場合、Interstageのサーバ機能はインストールできません。

アプリケーションの停止

・ Windows(R)上のすべてのアプリケーションを停止させてください。

Interstageをインストールする際に、Interstageが利用するディスク、レジストリなどの資源を使用しているとインストール作業に失敗する場合があります(例:イベントビューア、エクスプローラ、レジストリエディタなど)。

・ Interstageがインストールされており、Interstageのサービスが起動している場合は停止してください。

環境の確認

 本ソフトウェアはシステム環境変数のPATH、CLASSPATHに以下のパスを追加します。不必要なパスを設定している場合は削除 してください。システム環境変数PATH、CLASSPATHの有効長を超える場合、パスは設定されません。"C:¥Interstage"にInterstage をインストールした場合について説明します。

[PATH]

C:¥Interstage¥JDK5¥bin C:¥Interstage¥JRE5¥bin C:¥Interstage¥JDK14¥bin C:¥Interstage¥JRE14¥bin C:¥Interstage¥bin C:¥Interstage¥ODWIN¥bin

[CLASSPATH]

C:¥Interstage¥ODWIN¥etc¥class¥ODjava4.jar C:¥Interstage¥eswin¥lib¥esnotifyjava4.jar C:¥Interstage¥lib¥isadmin_scs.jar C:¥Interstage¥jms¥lib¥fjmsprovider.jar C:¥Interstage¥J2EE¥lib¥isj2ee.jar C:¥Interstage¥J2EE¥lib¥providerutil.jar C:¥Interstage¥J2EE¥lib¥fscontext.jar C:¥Interstage¥F3FMuddic¥lib¥fjuddi4j.jar C:¥Interstage¥F3FMuddic¥lib¥isplugin.jar

C:¥Interstage¥F3FMebms¥lib¥isebms4.jar C:¥Interstage¥lib

- ・ Interstageのインストール時に必要なディスク容量については、"2.5 インストール時に必要なディスク容量"を参照してください。
- Interstageをインストールするシステムにおいて、アプリケーションを含むすべてのサービスでポート番号が重複する可能性がない かを以下の手順で確認してください。システム上のすべてのサービスにおいて、それぞれ異なるポート番号を設定する必要があり ます。
 - 1. システム上のサービスが使用しているポート番号を確認します。ポート番号の確認方法については、それぞれのサービスのマニュアルを参照してください。
 - 2. Interstageのサービスが使用するポート番号を確認します。Interstageのサービスが使用するポート番号については、"運用ガイド (基本編)"の"ログ情報、ポート番号"ー"ポート番号"を参照してください。
 - 3. 1.と2.のポート番号が重複していないかを確認します。 ポート番号が重複している場合は、以下のいずれかの方法で対処してください。
 - Interstageのインストール前に、ポート番号が重複する可能性のあるシステム上のサービスを停止させます。
 - Interstageのインストール時の"ポート番号の設定"画面で、Interstageのサービスが使用するポート番号を未使用のポート番号に変更します。
 - 注)本画面では、すべてのサービスのポート番号を変更することはできません。
 - Interstageのインストール後に、それぞれのポート番号の設定箇所で、ポート番号を未使用のポート番号に変更します。 Interstageのサービスが使用するポート番号の設定箇所については、"運用ガイド(基本編)"の"ログ情報、ポート番号" - "ポート番号"を参照してください。



Interstageをインストールするシステムにおいて、WebサーバとしてMicrosoft(R) Internet Information Servicesを使用している場合 は、Webサーバ(Interstage HTTP Server)の初期値のポート番号がMicrosoft(R) Internet Information Servicesの初期値のポート番号と同じ値(80)で設定されるため、注意してください。

Interstageのインストール時の"ポート番号の設定"画面でポート番号を変更しないでインストールを続行させた場合は、インストール後のサービス"FJapache"の起動処理でエラーが発生します。インストール前にMicrosoft(R) Internet Information Servicesを停止 させるか、Webサーバを共存させる場合は、どちらかのポート番号を未使用のポート番号(80以外)に変更して運用してください。

必要なソフトウェアのインストール

以下のソフトウェアがインストールされていない場合は、インストールしてください。

- Microsoft(R) Internet Explorer
- ・インターネットプロトコル(TCP/IP)



Interstageでは、IPv6/IPv4デュアルスタックのみサポートしています。IPv6環境での運用を行う場合でも、IPv4のインターネットプロトコル (TCP/IP)がインストールされてかつ、有効である必要があります。なお、IPv4のインターネットプロトコル(TCP/IP)がインストールされてい ない環境でInterstageのインストールを実行した場合、各種ポート番号の設定時に有効なポート番号を設定しても使用中である旨のメッ セージが表示されます。この場合、IPv4のインターネットプロトコル(TCP/IP)をインストールしてから、Interstageのインストールを実行し てください。

.

- 22 -

ソフトウェアのアンインストール

本ソフトウェアの排他ソフトウェアをインストールしている場合には、これらのソフトウェアをアンインストールしてください。また、以下のソフトウェアをインストールしている場合もアンインストールしてください。

- ・ 前バージョン・レベルのInterstageに同梱のJava実行環境サーバパッケージ
- ・ Interstage Apworks クライアント運用パッケージ
- ・ Interstage Traffic Directorの負荷分散、QoS制御機能

ターミナルサービスのモード変更

以下のコマンドを実行して、ターミナルサービスをインストールモードに変更してください。

CHANGE USER /INSTALL



- ターミナルサービスが実行モードでインストールを行うと、インストールがハングアップしてインストールに失敗する場合があります。
- ターミナルサービスが実行モードでインストールを行うと、"ターミナルサービスが実行モードの場合"に示すメッセージが出力される場合があります。
- インストール中にターミナルサービスをインストールモード、または実行モードに変更した場合、ターミナルサービスのモードが変更 されたことを示すメッセージが表示されてインストールに失敗します。

上記のような状態になった場合、"ターミナルサービスが実行モードの場合"または"セットアップステータスでハングアップした場合"に 示す対処を行ってください。

4.2 新規インストール

本ソフトウェアをインストールする方法を説明します。 なおここで説明する手順は、コンピュータの管理者、またはAdministratorsグループのメンバで行ってください。

4.2.1 インストールの開始

インストールCD-ROMをコンピュータのCD-ROMドライブにセットし、表示される以下の画面で[インストール]をクリックしてください。



4.2.2 タイプの選択

"サーバタイプの選択"画面で、[アプリケーションサーバ機能をインストール]、[管理サーバ機能をインストール]、または[Web Package 機能をインストール]を選択し、[次へ]をクリックしてください。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.0	<
サーバタイプの選択 サーバタイプを選択してください。	
サーバタイプを選択して、D欠ヘ]をクリックしてください。	
⑦ アプリケーションサーバ機能をインストール(A)	
アプリケーションサーバ機能(管理対象サーバとして運用する場合を含む)を使用する場合に選択します。 管理サーバ機能とアプリケーションサーバ機能を同一サーバ上で使用する場合も本項目を選択します。	
○ 管理サーバ機能をインストール(D)	
管理サーバ機能をインストールする場合に選択します。 管理サーバ機能をインストールすることで管理サーバとして複数のサーバを管理できます。	
○ Web Package機能をインストール(W)	
Web Package機能をインストールする場合に選択します。 Web Package機能をインストールすることでWebサーバ環境を業務フロントシステム上に構築できます。	
InstallShield	_
次へ(N)> キャンセル	

[管理サーバ機能をインストール]または[Web Package機能をインストール]を選択した場合は、"4.2.3 インストールの確認" 画面に移ります。

"インストールタイプの選択"画面で、[標準インストール]または[カスタムインストール]を選択し、[次へ]をクリックしてください。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.	3.0
インストールタイプの選択 インストールタイプを選択してください。	
インストールタイプを選択して、[次へ]をクリックしてください。	
● 標準インストール①	
標準的に使用する機能をインストールします。	
○ カスタムインストール(©)	
機能を選択してインストールします。	
InstallShield	
<	戻る(B) 次へ(N)> キャンセル

注意

以下を選択した場合、Interstageで使用する予定のポート番号がすでに使用された状態であるとき、警告メッセージが表示されま

- す。 "4.2.3 インストールの確認" 画面で、 [変更する]を選択してポート番号を変更してください。
- ・ [アプリケーションサーバ機能をインストール]の[標準インストール]
- [管理サーバ機能をインストール]
- ・ [Web Package機能をインストール]

以下を選択した場合、"4.2.4 Interstageのインストール先の設定"画面に移ります。

・ [アプリケーションサーバ機能をインストール]の[カスタムインストール]

4.2.3 インストールの確認

"インストールの確認"画面で、インストール内容を確認してください。

以下は、[アプリケーションサーバ機能をインストール]および[標準インストール]の場合に表示される画面です。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.0	×
インストールの確認 インストールを開始する前に、設定内容を確認してください。	ge
現在の設定でよい場合は、D次へ]ボタンをクリックしてください。インストールを開始します。 変更を必要とする場合は、[変更する]を選択し、D次へ]ボタンをクリックしてください。	
サーバタイプ: アプリケーションサーバ機能をインストール	^
インストールタイプ: 標準インストール	
インストール先: C¥Interstage	
 設定内容への対処を選択してください ○ 変更しない(D) ○ 変更する(C) 	
InstallShield	
< 戻る(B) (次へ(N))> キ	ャンセル

- ・ 表示された内容でインストールする場合、[変更しない]を選択したまま、[次へ]をクリックしてください。"4.2.17 インストール"画面に 移ります。
- ・表示された内容を変更する場合、[変更する]を選択し、[次へ]をクリックしてください。

4.2.4 Interstageのインストール先の設定

"インストール先の選択"画面で[参照]をクリックし、Interstageのインストール先を設定して、[次へ]をクリックしてください。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.0	×
ファイルをインストールするフォルダを選択します。	ant .
セットアップは、次のフォルダに Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.0 をインストールします。	
このフォルダへのインストールは、D次へJボタンをクリックします。	
別のフォルダヘインストールする場合は、「参照]ボタンをクリックしてフォルダを選択してください。	
┌ インストール先のフォルダーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー	_
C:¥Interstage 参照(B)	1
	-
InstallShield	
< 戻る(B) (次へ(N))> キャンセ	n



インストールフォルダに関する注意事項

- インストールフォルダ名には以下の文字を指定できます。
 - 半角英数字
 - 半角スペース
 - 「_」
 - 「_」

これら以外の文字を指定すると、サービス登録に失敗して、インストールがハングアップすることがあります。ハングアップした場合 には、インストール時のトラブル対処方法の"サービスの登録に失敗しハングアップした場合"を参照して対処してください。

- 一度設定したフォルダ以外の別フォルダを設定しなおした場合、先に作成したフォルダが残る場合があります。必要なければ削除してください。
- ・Windows Server® 2003上でインストールする場合、"インストール先の選択"画面で[参照]をクリックし、表示された"ディレクトリの 選択"画面で以下の操作を行うと、"ディレクトリの選択"画面からカーソルがはずれ、ディレクトリのパスが入力できなくなることがあ ります。
 - 不当なフォルダ(ドライブ名がないなど)を入力し、再入力を促すダイアログで[OK]をクリックする
 - [キャンセル]をクリックし、再度"インストール先の選択"画面から素早く[参照]をクリックする
 - "ディレクトリの選択"画面から別の画面をアクティブな状態にする

上記の場合、[キャンセル]をクリックして"ディレクトリの選択"画面を終了させ、再度"インストール先の選択"画面で[参照]をクリックして、"ディレクトリの選択"画面で正しいフォルダを入力してください。

・ マルチサーバ管理機能を使用する場合は、"5.1 マルチサーバ管理機能"にも注意してください。

以下の場合、"4.2.7 JDKまたはJREのインストール先の設定"画面に移ります。

- ・ [アプリケーションサーバ機能をインストール]の[標準インストール]
- ・ [アプリケーションサーバ機能をインストール]の[管理サーバ機能をインストール]
- ・ [アプリケーションサーバ機能をインストール]の[Web Package機能をインストール]

4.2.5 インストール機能の選択

本画面は、カスタムインストールや機能の追加と削除の場合に表示されます。 "インストール機能の選択"画面で、インストールする機能をチェックし、[次へ]をクリックしてください。

Interstage Application Server Enterprise Edition	N V9.3.0
インストール機能の選択	
インストールする機能を選択してください。	
■・ ■ Interstage Application Server ■・ ■ JDK/JRE □ フレームワーク	- 説明 Interstage Application Serverの 基本機能です。
必要な容量: 1.01 GB(ドライブC) 使用できる容量: 4.11 GB(ドライブC) InstallShield	
	< 戻る(B) 次へ(N)> キャンセル

🔓 注意

本画面で表示している[必要なディスク容量]よりもさらに約140Mバイト空き容量が必要です。十分な空きを確保してください。

.

4.2.6 JDKまたはJREの選択

本画面は、カスタムインストールや機能の追加と削除の場合に表示されます。 "JDKまたはJREの選択"画面で、[JDK]または[JRE]を選択し、[次へ]をクリックしてください。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.0	×
JDKまたはJREの選択	
JDKまたはJREを選択してください。	
C J <u>DK</u>	
⊂ J <u>R</u> E	
InstallShield	
< 戻る(<u>B</u>)	次へ(N) > キャンセル

4.2.7 JDKまたはJREのインストール先の設定

"インストール先の選択"画面で[参照]をクリックし、JDKまたはJREのインストール先を設定して、[次へ]をクリックしてください。 カスタムインストールや機能の追加と削除の場合は、選択したJDKまたはJREのインストール先を設定してください。 以下は、[JDK]をインストールする場合に表示される画面です。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.0	×
インストール先の選択 JDK5.0をインストールするフォルダを選択してください。	
JDK5.0のインストールフォルダを変更する場合は、[参照]ボタンをクリックし、変更分	ものフォルダを選択してください。
インストールに必要なディスク容量 108 MB	
各ドライブの現在の空き容量 C: 4207 MB D: 1017 MB	
┌ インストール先のフォルダーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー	
C:¥Interstage¥JDK5	参照(<u>R</u>)
InstallShield	
〈 戻る(B) ()次	(N)> キャンセル

以下は、[JRE]をインストールする場合に表示される画面です。[Web Package機能をインストール]の場合、本画面が表示されます。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.0	×
インストール先の選択	PInterstage
JRE5.0をインストールするフォルダを選択してください。	(int
JRE5.0のインストールフォルダを変更する場合は、[参照]ボタンをクリックし、変更先のフォ	ャルダを選択してください。
インストールに必要なディスク容量 84 MB	
各ドライブの現在の空き容量 C: 4207 MB D: 1017 MB	
┌ インストール先のフォルダーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー	
C:¥Interstage¥JRE5	参照(<u>R</u>)
InstallShield	
〈 戻る(B) (次へ(N))	シ キャンセル

4.2.8 セキュリティ運用形態の選択

"運用形態の選択"画面で、Interstage管理コンソールのセキュリティ運用形態を選択します。[SSL暗号化通信を使用する]または[SSL 暗号化通信を使用しない]を選択し、[次へ]をクリックしてください。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.0	×
運用形態の選択	
Interstage管理コンソールのセキュリティ運用形態を選択してくださ い。	
SSL暗号化通信の有無を選択して、[次へ]ボタンをクリックしてください。	
SSL暗号化通信を使用する。(U)	
○ SSL暗号化通信を使用しない。(D)	
InstallShield	
〈 戻る(B) 次/	(<u>W</u>)> キャンセル

「SSL暗号化通信を使用しない。」を選択した場合は、Interstage管理コンソールをアクセスするためのIDやパスワードなどが、ネットワーク上をそのまま流れます。そのため、通信データが傍受されないような対策を実施することを推奨します。

4.2.9 ポート番号の設定

"ポート番号の設定"画面で、使用するポート番号を指定して、[次へ]をクリックしてください。ポート番号を変更しない場合は、そのまま [次へ]をクリックしてください。

以下は、[アプリケーションサーバ機能をインストール]の場合に表示される画面です。

Interstage Application Server Enterprise Edition	n V9.3.0			×
ボート番号の設定 製品が使用するボート番号を変更する場合、設定してく	ださい。	S Inte	rstage	
ポート番号を入力して、[次へ]ボタンをクリックしてください	0			
Interstage管理コンソール			12000	
Webサーバ(Interstage HTTP Server)			80	
CORBAサービス			8002	
InstallShield				
	く 戻る(<u>B</u>)	<u>沃へ图></u>	キャンセル	,

それぞれ以下のポート番号が初期値として設定されています。変更する場合、有効な入力は1~65535の範囲の半角数字です。

アプリケーションサーバ機能のインストールの場合

機能	ポート番号の初期値
Interstage管理コンソール	12000
Webサーバ(Interstage HTTP Server)	80
CORBAサービス	8002

管理サーバ機能またはWeb Package機能のインストールの場合

機能	ポート番号の初期値
Interstage管理コンソール	12000
Webサーバ(Interstage HTTP Server)	80

選択したポート番号が、すでに使用されている場合や重複している場合には、以下の"ポート番号の再設定"画面が表示されます。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.0	×
ボート番号の再設定 指定されているボート番号はすでに使用されています。 ボート番号を再入力してください。	S Interstage
ポート番号を再入力して、[OK]ボタンをクリックしてください。 ポート番号チェックを無視する場合は、[無視]ボタンをクリックしてください。 [Webサーバ(Interstage HTTP Server)]	
	30
InstallShield	無視①
	<u>QK</u> キャンセル

- ・ポート番号を変更する場合は、未使用のポート番号を入力し、[OK]をクリックしてください。
- ・ポート番号を変更しない場合は、[無視]をクリックしてください。その場合、Interstageの運用を開始する前に、重複したポート番号を使用しているアプリケーションを停止し、ポートが重複しないようにする必要があります。

4.2.10 メッセージマニュアルのインストール選択

"メッセージマニュアルのインストール選択"画面で、メッセージマニュアルのインストール有無を選択します。Interstage管理コンソールから直接メッセージマニュアルを参照可能にする場合、[メッセージマニュアルをインストールする。]を選択し、[次へ]をクリックしてください。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.0	×
メッセージマニュアルのインストール選択 メッセージマニュアルのインストール有無を選択してください。	Interstage
メッセージマニュアルのインストール有無を選択して、[次へ]ボタンをクリックしてください。	
○ メッセージマニュアルをインストールする。 Φ	
○ メッセージマニュアルをインストールしな(い。(D)	
InstallShield 〈 戻る(B) 〉 次へ(N) 〉	> キャンセル

関 ポイント

[メッセージマニュアルをインストールしない。]を選択してインストールし、その後、Interstage管理コンソールからメッセージマニュアルを 参照するように変更する場合は、以下の作業を実施してください。なお以下ではC:¥Interstageにインストールした場合を例に説明しま す。

- 1. "C:¥Interstage¥gui¥msgman"フォルダを作成してください。
- 2. インストールCD-ROM内の"¥msgman"配下に存在する"ismsg.zip"を"C:¥Interstage¥gui¥msgman"配下に複写してください。
- 3. コンピュータを再起動してください。

4.2.11 MessageQueueDirectorまたはebXML Message Serviceのインストール 先の設定

本画面は、以下の場合に表示されます。

- ・ MessageQueueDirectorまたはebXML Message Serviceを選択した場合、かつ
- ・ InterstageインストールフォルダがNTFSでない場合

MessageQueueDirectorまたはebXML Message Serviceは、NTFS上にインストールする必要があります。Interstageインストールフォルダが NTFSでない場合、"インストール先の選択"画面が表示されます。MessageQueueDirectorまたはebXML Message Serviceをインストー ルするNTFS上のフォルダを設定し、[次へ]をクリックしてください。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.0		×
インストール先の選択 セットアップがファイルをインストールするフォルダを選択してください。		
NTFSにインストールする必要があるコンポーネントを選択しています。 [参照]ボタンをクリックし、コンポーネントをインストールするフォルダを選択してください。		
MessageQueueDirector		
┌ インストール先のフォルダーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー		
C:¥Interstage	参照(<u>R</u>)	
InstallShield		
< 戻る(<u>B</u>) 次へ	<u>N)> キャン</u>	ยน



4.2.12 J2EE共通ディレクトリの作成先の設定

管理サーバ機能のインストールの場合は、J2EE共通ディレクトリの設定はありません。

"インストール先の選択"画面で[参照]をクリックし、J2EE共通ディレクトリの作成先を設定して、[次へ]をクリックしてください。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.0	×
J2EE共通ディレクトリの選択 J2EE共通ディレクトリを選択してください。	H
J2EE共通ディレクトリのインストールフォルダを変更する場合は、[参照]ボタンをクリックし、変更先のフォルダを選 択してくだざい。 J2EE共通ディレクトリは、J2EEアプリケーション資源を一元管理するためのフォルダです。	
インストール先のフォルダ C:¥Interstage¥J2EE¥var¥deployment 参照(<u>R</u>) InstallShield	
< 戻る(B) (次へ(N)) キャンセル	



"インストールフォルダに関する注意事項"を参照してください。

4.2.13 Java EE機能の認証情報の設定

"Java EE機能の認証情報の設定"画面で、管理ユーザーIDおよびパスワードを指定して、[次へ]をクリックしてください。パスワードの確認入力には、パスワードの入力と同じ文字列を入力してください。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.0	×
Java EE 機能の認証情報の設定 Java EE機能の認証情報を設定してください。	
認証情報を入力して、D次へ]ボタンをクリックしてください。	
管理ユーザーID	admin
パスワード(8文字以上20文字以下)	****
パスワードの確認入力	*****
InstallShield	
< 戻る(B)	次へ(11) > キャンセル



入力時の注意事項

設定項目	注意事項
管理ユーザーID	・1文字以上、255文字以内で指定してください。
	・ 半角の英数字または、"_"、"-"、"."が使用できます。
パスワード	・8文字以上、20文字以内で指定してください。
	 ・半角の英数字と記号が使用できます。(空白および制御コードを除く、0x21-0x7eの 範囲のascii文字)

4.2.14 Java EE機能のポート番号の設定

"Java EE機能のポート番号の設定"画面で、使用するポート番号を指定して、[次へ]をクリックしてください。ポート番号を変更しない場合は、そのまま[次へ]をクリックしてください。

.

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.	
Java EE機能のボート番号の設定 Java EE機能が使用するボート番号を変更する場合、設定して	(ださい。
ポート番号を入力して、 D欠ヘ]をクリックしてください。	
ӏѸ҄҄҄҄҄ѫー	23600
IIOP_SSL#~F	23601
IOP_MUTUALAUTHポート	23602
JMX_ADMIN#~-F	8686
InstallShield	
< 戻	る(B) 次へ(N)> キャンセル

それぞれ以下のポート番号が初期値として設定されています。変更する場合、有効な入力は1~65535の範囲の半角数字です。

機能	ポート番号の初期値
IIOPポート	23600
IIOP_SSLポート	23601
IIOP_MUTUALAUTHポート	23602
JMX_ADMINポート	8686

4.2.15 Java EE機能で使用するJDKの選択

"Java EE機能で使用するJDKの選択"画面で、使用するJDKのバージョンを選択して、[次へ]をクリックしてください。なお、インストール機能として"JDK5.0"のみを選択した場合は、本画面は表示されずに"JDK5.0"がJava EE機能で使用するJDKとして設定されます。

Interstage Application Server Enterprise Edition	n V9.3.0		×
Java EE機能で使用するJDKの選択		S Interstage	
Java EE機能で使用するJDKを選択してください。			
JDK5.0			
⊙ J <u>D</u> K6			
InstallShield			
	く戻る(<u>B</u>) 次	∧(<u>N</u>)> ≠+>>t	211

4.2.16 Java EE共通ディレクトリの作成先の設定

"インストール先の選択"画面で[参照]をクリックし、Java EE共通ディレクトリの作成先を設定して、[次へ]をクリックしてください。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.0	×
Java EE共通ディレクトリの選択 Java EE共通ディレクトリを選択してください。	stage
Java EE共通ディレクトリのインストールフォルダを変更する場合は、[参照]ボタンをクリックし、変更: 選択してください。 Java EE共通ディレクトリは、 Java EEの資源を一元管理するためのフォルダです。	先のフォルダを
インストール先のフォルダー C:¥Interstage¥F3FMisjee¥var <	参照(<u>R</u>)
Thistaliphieid	キャンセル



Java EE共通ディレクトリに関する注意事項

- ・ "インストールフォルダに関する注意事項"を参照してください。
- ・ Java EE共通ディレクトリをデフォルト値から変更する場合は、存在しないフォルダ、または、配下にファイルやフォルダが存在しない空フォルダを指定してください。ただし、いずれの場合も親フォルダは存在する必要があります。
- ・ Java EE共通ディレクトリをデフォルト値から変更する場合は、半角スペースを含むパスを指定することはできません。

.....

4.2.17 インストール

"インストールの確認"画面で設定内容を確認し、内容に誤りがなければ、[インストール]をクリックしてください。インストールが開始されます。

インストールを実行することで、インストール機能として選択した機能のセットアップ処理が実行されます。

以下は、[アプリケーションサーバ機能をインストール]および[標準インストール]の場合に表示される画面です。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.3.0	×
インストールの確認 インストールを開始する前に、設定内容を確認してください。	
現在の設定でよい場合は、「インストール]ボタンをクリックしてください。インストールを開始します。 変更を必要とする場合は、「戻る]ボタンをクリックしてください。	
現在の設定	
サーバタイプ: アプリケーションサーバ機能をインストール インストールタイプ: 標準インストール インストール先: C¥Interstage インストール容量:	
InstallShield	
< 戻る(B) インストール(D) キャンセル	n 🗌

インストール完了後、[完了]をクリックして、"4.4 インストール後の作業"を行ってください。"クイックスタートガイド"を参照する場合は、 [クイックスタートガイドを開く]をチェック、[完了]をクリックした後、"4.4 インストール後の作業"を行ってください。 なおインストール時にトラブルが発生した場合は、"4.5 インストール時のトラブル対処方法"を参照して対処してください。



 Web Package機能のインストール時に表示されるセットアップステータスは、アプリケーションサーバ機能および管理サーバ機能の インストール時に表示されるセットアップステータスと異なり、インストール中のファイル名表示なくプログレスバーが進みますが、イ ンストールは正常に行われています。

4.3 機能の追加と削除

現在インストールされている機能に対して機能を追加または削除する方法を説明します。 なおここで説明する手順は、コンピュータの管理者またはAdministratorsグループのメンバで行ってください。

4.3.1 注意事項

4.3.1.1 セットアップしていた機能をアンインストールする場合

以下の機能をInterstage統合コマンドまたはInterstage管理コンソールを使用してセットアップし、これらの機能を機能の追加と削除でアンインストールする場合は、事前にInterstage統合コマンドまたはInterstage管理コンソールを使用して、これらの機能のサービス削除を行ってからアンインストールを実行してください。

- ・ イベントサービス
- ・ Webサーバ(Interstage HTTP Server)
- SOAPサービス(注)
 注)事前に、CORBA/SOAPクライアントゲートウェイをアンセットアップしてください。

なおセットアップの詳細に関しては、"運用ガイド(基本編)"の"Interstage統合コマンドによる運用操作"、"Interstage管理コンソールによる Interstage運用"を参照してください。

4.3.1.2 ポート番号の設定に関する注意事項

機能の追加と削除で機能追加する場合、インストール時に使用されているポート番号を指定することはできません。このため、削除予定の機能が使用しているポート番号を追加予定の機能が設定しようとする場合、削除予定の機能がポートを使用中のため、設定することができない場合があります。これは、削除予定の機能が起動中の場合、ポートを使用しているため、ポートがすでに使用済みと判断されるからです。この場合、削除予定の機能のサービスを停止し、再度インストール処理を実施してください。

4.3.1.3 マルチサーバ管理機能を使用している場合

Interstageのマルチサーバ管理機能を使用している場合、管理対象サーバに対する機能の追加と削除は行えません。 機能の追加と削除を行う場合は、その管理対象サーバをサイトから削除し、スタンドアロンサーバにしてから実行してください。

4.3.1.4 J2EE機能をアンインストールする場合

機能の追加と削除でJ2EE機能をアンインストールする場合には、事前にInterstage管理コンソールを使用して、IJServerをすべて削除 してください。

4.3.1.5 セキュア通信サービスをアンインストールする場合

Interstage管理コンソールのセキュリティ運用形態を[SSL暗号化通信を使用する。]として運用している状態で、セキュア通信サービス をアンインストールする場合は、[SSL暗号化通信を使用しない。]設定に変更してください。設定方法の詳細については、"運用ガイド (基本編)"の"Interstage管理コンソールの構成"ー"Interstage管理コンソール環境のカスタマイズ"の"Interstage管理コンソールのSSL 暗号化通信のカスタマイズ"を参照してください。 セキュリティ運用形態を変更した場合は、必要に応じてWindows(R)の[スタート]メニューから[プログラム] > [Interstage] > [Application Server] > [Interstage管理コンソール]のプロパティに指定してあるURLを変更してください。

4.3.1.6 フレームワークをアンインストールする場合

機能の追加と削除でフレームワークをアンインストールする場合は、事前に以下の作業を実施してください。

- フレームワークを使用したアプリケーションをワークユニットに配備している場合、配備解除してください。
- ・ ワークユニットの環境設定において、クラスパスにフレームワークのJARファイルを指定している場合は、クラスパスの設定から削除してください。

4.3.1.7 Java EE機能をアンインストールする場合

機能の追加と削除でJava EE機能をアンインストールする場合は、同時にJDK/JREのアンインストールやJDK/JREの種別の変更をしないでください。

上記の変更が必要な場合は、いったんJava EE機能をアンインストールしてから、再度、インストーラを起動させ、機能の追加と削除でJDK/JREの状態を変更してください。

4.3.2 インストール作業

1.インストールの開始

インストールCD-ROMをコンピュータのCD-ROMドライブにセットし、表示される画面("4.2.1 インストールの開始"を参照)の[インストール]をクリックしてください。

2.機能の追加と削除の確認

"機能の追加と削除"画面で、[OK]をクリックしてください。



3.インストール機能の選択

"インストール機能の選択"画面が表示されます。

- ・機能を追加、削除しない場合は、そのまま[次へ]をクリックしてください。
- ・機能を追加、削除する場合は、追加する機能をチェックし、削除する機能のチェックをはずして、「次へ」をクリックしてください。

"インストール機能の選択"画面の詳細と、以降の操作については、新規インストールの"4.2.5 インストール機能の選択"を参照してください。



インストール時にサービスが起動中の場合、以下の"サービス停止の確認"画面が表示されます。インストールを続行する場合、[はい] をクリックしてください。自動的にサービスが停止し、インストールが開始されます。

以下のサービスが動作しています。停止してインストール処理を続行しますか? Interstage JServlet(OperationManagement) Interstage Java EE DAS Interstage Java EE Node Agent OD_start InterfaceRep_Cache Service InterfaceRep_Cache_e Service Naming Service INTERSTAGE TransactionDirector ObjectTransactionService F Japache Interstage Server Monitor Service(Cache Manager) Interstage Server Monitor Service Interstage Operation Tool Interstage Operation Tool(F Japache) Fujitsu Enabler
(まい(2)) いいえ(N)



- インストール中は必ずイベントビューアなどのアプリケーションを停止してください。イベントビューアなどのアプリケーションが起動している場合、インストール資源が置き換わらず、誤動作する可能性があります。
- インストール中は、Interstageのセットアップ状態を示す画面(セットアップステータス)が表示されます。セットアップステータスが表示中は、"Alt"キーを押下しながら"C"キーを押下(Alt+C)したり、[Cancel]、[キャンセル]をクリックしないでください。実施した場合、インストールがハングアップする場合があります。インストール時のトラブル対処方法の"セットアップステータスでハングアップした場合"を参照して対処してください。
- ・ インストール完了後はコンピュータの再起動を促す画面が表示されます。必ず再起動してください。

4.4 インストール後の作業

不必要なフォルダの削除

インストール中に[キャンセル]をクリックして処理を中断した場合などは、本ソフトウェアのインストール先として指定したインストールフォ ルダが残ることがあります。必要に応じて削除してください。

ターミナルサービスの実行モードへの変更

インストール前の作業で、ターミナルサービスをインストールモードに変更した場合は、以下のコマンドを実行して、ターミナルサービス を実行モードに変更してください。

CHANGE USER /EXECUTE

Interstageインストール資源のセキュリティ強化

InterstageをNTFS形式のドライブにインストールした場合、インストール資源のアクセス権を変更し、一般ユーザによる資源の改ざんを防ぐことができます。必要に応じて実施してください。

Interstageのインストールフォルダ配下のフォルダおよびファイルに対して、不特定のユーザからのアクセスを防ぐ権限に変更するためには、issetfoldersecurityコマンドを使用します。issetfoldersecurityコマンドについては、"リファレンスマニュアル(コマンド編)"を参照してください。

なお以下に示すInterstageの各種操作を一般ユーザ(コンピュータの管理者およびAdministratorsグループに属さないメンバ)で実施す る場合、Interstageインストールフォルダ配下のすべてのフォルダおよびファイルに、操作を行う一般ユーザのアクセス権を設定する必 要があります。この場合、アクセス権を設定するユーザ名またはグループ名を指定して、issetfoldersecurityコマンドを実行してください。

以下のコマンドの詳細については、"リファレンスマニュアル(コマンド編)"を参照してください。

- ・ CORBAサービスの以下のコマンド実行時
 - odlistnsコマンド
 - ー IDLcコマンド
 - odlistirコマンド
- ・ odwin.dllを使用したCORBAアプリケーションの使用時
- ・ EJBサービス運用コマンド実行時
- ・ ワークユニット管理コマンド実行時
- Interstage運用API使用時
- ・ イベントサービス運用コマンド実行時
- ・ JMS運用コマンド実行時
- ・JMSを使用したアプリケーションの使用時
- ・ バックアップコマンド実行時
- ・ Interstage証明書環境を利用した、SSLなど署名や暗号処理の使用時

Interstage V6.0L10までのコマンド、DLLファイルの格納先

Interstage V7.0L10より各サービスが提供するコマンド、DLLファイルの格納先が変更されました。Interstage V6.0以前の格納先の構成 を意識した処理を行っている場合、以下のどちらかの対処を行ってください。

- ・ 新格納先に合わせた処理に修正してください。
- issetcompatiblepathコマンドを使用して、Interstage V6.0以前の格納先にコマンド、DLLファイルを複写してください。
 issetcompatiblepathコマンドの詳細は、"リファレンスマニュアル(コマンド編)"を参照してください。

Interstage管理コンソールのSSL暗号化通信用の証明書のフィンガープリントの確認

インストール時に、運用形態として「SSL暗号化通信を使用する」を選択した場合は、Interstage管理コンソールのSSL暗号化通信で利用する証明書が生成されています。WebブラウザからInterstage管理コンソールに正しく接続しているかを確認するときのために、ここでは生成されている証明書のフィンガープリントを確認しておきます。

「SSL暗号化通信を使用しない」を選択した場合は、証明書は生成されていないため、本操作を実施する必要はありません。 証明書のフィンガープリントの確認方法を以下に示します。

"%CommonProgramFiles%¥Fujitsu Shared¥F3FSSMEE¥cmdspcert.exe" -ed [Interstageインストールフォルダ]¥gui¥etc¥cert -nn SSLCERT | find "FINGERPRINT"

証明書のフィンガープリントは以下のように表示されます。

FINGERPRINT (MD5):	40 79 98 2F 37 12 31 7C AE E7 B4 AB 78 C8 A2 28	
FINGERPRINT (SHA1) :	07 28 BE 26 94 89 6D F9 1E 16 F2 27 D0 6A 7F F1 88 11 98 FB	

表示されたフィンガープリントは記録しておいてください。

なお、この証明書は、Interstage管理コンソールとWebブラウザ間のSSL暗号化通信において、インストール直後から簡単にSSL暗号化 通信が利用できるようにすることを目的に、本製品が自動生成したものです。セキュリティを強化したい場合は、認証局から取得した証 明書を利用する運用に切り替えることができます。運用を切り替える方法については、"運用ガイド(基本編)"の"Interstage管理コンソー ル環境のカスタマイズ"を参照してください。

4.5 インストール時のトラブル対処方法

環境変数の設定に失敗した場合

インストール終了時に以下のいずれかのメッセージが表示された場合、環境変数の設定に失敗しています(xxxxにはエディション名が 出力されることがあります)。

- ・ Interstage Application Server xxxxで必要な環境変数の設定ができませんでした。 以下のファイルを参照し、システム環境変数にPATHを設定してください。
- Interstage Application Server xxxxで必要な環境変数の設定ができませんでした。
 以下のファイルを参照し、システム環境変数にCLASSPATHを設定してください。
- Interstage Application Server xxxxで必要な環境変数の設定ができませんでした。
 以下のファイルを参照し、システム環境変数にPATH、CLASSPATHを設定してください。

上記の場合、以下の手順に従って、システム環境変数のPATH、CLASSPATHを設定してください。以下では、"C:¥Interstage"に Interstageをインストールした場合について説明します。

- 1. [コントロールパネル] > [システム] > [詳細]タブをクリックしてください。
 - Windows® 2000の場合は[コントロールパネル] > [システム]の[環境]の環境変数ボタンをクリックしてください。
 - Windows Server® 2003の場合は[コントロールパネル]>[システム]>[詳細設定]の環境変数ボタンをクリックしてください。
 - Windows Server® 2008の場合は[コントロールパネル] > [システム] > [システムの詳細設定]を選択、ポップアップ表示される [システムのプロパティ]の[詳細設定]の環境変数ボタンをクリックしてください。
- 2. 不必要なパスを削除し、以下のファイルに記述されているパス情報をシステム環境変数のPATH、CLASSPATHに追加してください。
 - C:¥Interstage¥path.txt
 - C:¥Interstage¥classpath.txt
- 3. コンピュータを再起動してください。



・システム環境変数のPATH、CLASSPATHに設定できなかった場合、Interstageや各種サービスは起動されません。上記対処後、 コンピュータを再起動することで自動的にInterstageや各種サービスが起動されます。

- ・以下の場合には、インストール時にIJServerは作成されません。必要に応じてInterstage管理コンソールからIJServerを作成してください。
 - システム環境変数のPATH、CLASSPATHに設定できなかった場合

- IJServerの作成に必要なサービスの起動が失敗した場合

自動セットアップが失敗した場合

インストール時の自動セットアップが失敗した場合、自動セットアップの異常を示すダイアログが表示されます。自動セットアップの異常 を示すダイアログおよびイベントビューアに出力されたメッセージの対処を行った上で、以下の対処を行ってください。

- インストールが完了している場合は、isinitserviceコマンドによりセットアップを実施してください。isinitserviceコマンドの詳細は、"リファレンスマニュアル(コマンド編)"を参照してください。
- インストールに失敗した場合は、再度インストールしてください。

ファイルコピーなどの異常が発生した場合

インストール時にファイルコピーなどの異常が発生した場合、コンピュータの再起動を促す画面が表示されます。その場合、インストール終了後に表示されるコンピュータ再起動の選択画面で、「はい、今すぐコンピュータを再起動します。」または「いいえ、後でコンピュータを再起動します。」を選択し[完了]ボタンをクリックしてください。

インストール時にファイルコピーなどの異常が発生した場合のインストール処理は、コンピュータの再起動をもって完了します。「いい え、後でコンピュータを再起動します。」を選択した場合、Interstageの環境作成の前にコンピュータの再起動が必要です。

サービスの起動に関するエラーメッセージが出力された場合

インストール時にサービスの起動に関する以下のエラーメッセージが出力された場合の対処について説明します。

 以下のサービスの起動処理でエラーが発生しました。 Interstage Operation Tool

上記の場合、イベントビューアを参照し、「IS: 情報: is21011: INTERSTAGE Operation Toolを正常に停止しました.」が出力されている場合、動作に問題はありません。出力されていない場合は、イベントビューアに他のメッセージが出力されていないかを確認し、そのメッセージを参照して、失敗の原因を取り除いてください。

 以下のサービスの起動処理でエラーが発生しました。 TransactionDirector

上記の場合、イベントビューアを参照し、「TD: 情報: td11001: TDを正常に起動しました」が出力されている場合、動作に問題はありません。

・ 以下のサービスの起動処理でエラーが発生しました。

FJapache

上記の場合、Webサーバ(Interstage HTTP Server)に設定したポート番号が、他のサービス(Microsoft(R) Internet Information Servicesなど)に設定されているポート番号と重複していないかを確認してください。ポート番号が重複している場合は、そのサービスを停止させるか、異なるポート番号を設定してください。Webサーバ(Interstage HTTP Server)のポート番号の設定方法については、"Interstage HTTP Server 運用ガイド"の"環境設定"ー"環境定義ファイル"ー"ポート番号とIPアドレスの設定"を参照してください。

ポート番号の設定に問題がない場合は、イベントビューアを参照し、メッセージが出力されていないかを確認してください。メッセージが出力されている場合は、"メッセージ集"を参照してそのメッセージに対する対処を行ってください。

ターミナルサービスが実行モードの場合

以下の場合、ターミナルサービスが実行モードの可能性があります。

- ・以下のメッセージが出力された場合 「エラー番号:0x80040702 詳細:dllのロードに失敗しました。:odautosetup」
- ・イベントビューアにメッセージihs00012が出力された場合

・ インストールに失敗し、「エラー: is20102:INTERSTAGEの起動に失敗しました理由コード(10)」のポップアップが出力される。

上記の場合、Interstageをアンインストールした後、以下のコマンドを実行して、ターミナルサービスをインストールモードに変更し、再度 Interstageをインストールしてください。

CHANGE USER / INSTALL

Interstageのインストール完了後、以下のコマンドを実行して、ターミナルサービスを実行モードに変更してください。

CHANGE USER /EXECUTE

他製品によりCORBAサービスがインストールされている場合

Interstageに内蔵されているCORBAサービスは他の製品にも使用されています。 CORBAサービスが内蔵されている製品がすでにインストール済みの状態において、Interstageのインストールを行うと、以下のメッセージが出力されます。

以下の排他製品がインストールされているためインストール処理を中止します。
 Systemwalker Centric Manager/ObjectDirector

上記の場合、Systemwalker CentricMGR 運用管理サーバまたは、Systemwalker Centric Manager 運用管理サーバとInterstageを同一 マシンに導入する場合、"3.4 Systemwalker Centric Managerを導入するとき"を参照しInterstageをインストールしてください。 また、Web Package機能のインストールの場合、"2.2 排他ソフトウェア"に示す製品がインストールされている可能性があります。Interstage をインストールする場合は、該当の製品をアンインストール後、Interstageをインストールしてください。

- 以下の排他製品がインストールされているためインストール処理を中止します。 Interstage Security Director/ObjectDirector
- 以下の排他製品がインストールされているためインストール処理を中止します。 ObjectDirector

上記の場合、"2.2 排他ソフトウェア"に示す製品がインストールされている可能性があります。Interstageをインストールする場合は、該当の製品をアンインストール後、Interstageをインストールしてください。

Web Package機能のインストール時にServletサービスに関するエラーメッセージが出力された場合

Web Package機能のインストール時に、Servletサービスに関する以下のメッセージが出力された場合の対処について説明します。

・ Servletサービスの環境の初期設定ができませんでした。

上記の場合、IJServerとWebサーバをそれぞれ別のサーバマシンに分離して運用するための初期設定ができませんでした。 必要に応じて、IJServer用とWebサーバ用のサーバマシン上で、それぞれのInterstage管理コンソールから、[システム] > [環境設定]タブ > [Servletサービス詳細設定] > [Webサーバとワークユニットを同一のマシンで運用する]で[運用しない]を選択してください。

セットアップステータスでハングアップした場合

セットアップステータス表示中に"Alt"キーを押下しながら"C"キーを押下(Alt+C)、または[Cancel]、[キャンセル]をクリックした場合、 サービスの登録処理に失敗した旨のポップアップメッセージが表示され、Interstageのインストールがハングアップすることががありま す。 このような状態になった場合は、Interstageの資産・情報を削除した後、Interstageを再インストールしてください。 Interstageの資産・情報の削除方法は、インストールCD-ROMドライブの直下の"HowToDel.txt"(ドライブEの場合、E:¥HowToDel.txt です)を参照してください。

サービスの登録に失敗しハングアップした場合

インストールフォルダ名に使用できない文字、および記号を指定してインストールすると、サービス登録に失敗して、Interstageのインストールがハングアップすることがあります。

このような状態になった場合は、Interstageの資産・情報を削除した後、Interstageを再インストールしてください。 Interstageの資産・情報の削除方法は、インストールCD-ROMドライブの直下の"HowToDel.txt"(ドライブEの場合、E:¥HowToDel.txt です)を参照してください。

インストール資源が残る場合

セットアップステータス表示中に[Cancel]、[キャンセル]をクリックした場合、Interstageのインストール資源が残る場合があります。 このような状態になった場合は、以下の作業を行ってください。

- ・以下のフォルダが残っている場合は、削除してください(以下はC:¥Interstageにインストールしていた場合)。
 - C:¥Interstage¥ODWIN
 - C:¥Interstage¥F3FMsoap
- ・ CORBAサービスのファイルが残っている場合は、削除してください。なお、Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバを導入している場合は、削除後Interstageを再インストールしてください。
 - WINSYSDIR配下の以下のファイル

f3fmdgst.dll f3fmdgst_sv.dll f3fmic23.dll f3fmic25.dll f3fmic27.dll F3FMIC35.DLL F3FMIC77.DLL f3fmicis.dll libomircbl.dll LIBOMIRCBLMT.DLL LIBOMIRCBLMTSV.DLL libomircblsv.dll LIBOMIRCBLSVUC.DLL LIBOMIRCBLUC.DLL LIBOMIROOCOB.dll LIBOMIROOCOBSV.dll LIBOMIROOCOBSVUC.dll LIBOMIROOCOBUC.dll ODadmin.dll odautosetup.dll Odcn.dll Odcncpp.dll ODCNOOCOB.DLL ODCNOOCOBUC.DLL Odcnscpp.dll ODCNSOOCOB.DLL ODCNSOOCOBUC.DLL

Odcnsv.dll ODCOBCBL.DLL ODCOBCBLMT.DLL ODCOBCBLMTSV.DLL ODCOBCBLSV.DLL ODCOBCBLSVUC.DLL ODCOBCBLUC.DLL ODEVTLOG.DLL ODIF.DLL Odif_e.dll Odif_r.dll ODIFSV.DLL Odifsv_e.dll Odifsv_r.dll ODIRLOG.DLL ODiruty.dll ODjava.dll ODjava_g.dll ODjava_v2.dll ODjava_v2_g.dll ODjava2.dll ODjava2_g.dll ODjava2_v2.dll ODjava2_v2_g.dll ODjava4.dll ODjava4_g.dll ODjavas.dll ODjavas_g.dll ODjavas_v2.dll ODjavas_v2_g.dll ODjavas2.dll ODjavas2_g.dll ODjavas2_v2.dll ODjavas2_v2_g.dll ODjavas4.dll ODjavas4_g.dll Odjavasv.dll Odjavasv_g.dll Odjavasv_v2.dll Odjavasv_v2_g.dll Odjavasv2.dll Odjavasv2_g.dll Odjavasv2_v2.dll Odjavasv2_v2_g.dll Odjavasv4.dll Odjavasv4_g.dll odlbo.dll odlbosv.dll ODLBSCBL.DLL ODLBSCBLMT.DLL odlbscpp.dll ODLBSOOCOB.dll ODmisc.dll ODOBF.DLL ODOLE.INI ODoocob.DLL ODoocobsv.dll ODOOCOBSVUC.DLL

- ODOOCOBUC.DLL ODsocket.dll ODsocket_ipv6.dll ODsocketsv.ipv6.dll ODsocketsv_ipv6.dll Odsv.dll ODSVCPP.DLL Odsvcpppoa.dll odtsck.dll ODuty.dll odwin.dll ODWIN.INI ODWINCPP.DLL
- WINSYSDIR¥system32配下の以下のファイル

InterfaceRep_Cache_s.exe InterfaceRep_e.exe Naming.exe nslbo_service.exe ODEVTMSG.DLL odlbomsg.DLL ODLOADER.EXE Odstart.exe

- ・ F3FSSMEEのレジストリ情報が残っている場合は、以下に従い削除してください。
 - ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥F3FSSMEE¥Parent Product配下のキーが"INTERSTAGE"だけの場合

以下のキーを削除してください。

- ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥F3FSSMEE
- ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥F3FSSMEE
- ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥F3FSSMEE¥Parent Product配下のキーが"INTERSTAGE"だけ ではない場合

以下のキーを削除してください。

- ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥F3FSSMEE¥Parent Product¥INTERSTAGE
- ・ Securecrypto Library Rのレジストリ情報が残っている場合は、以下に従い削除してください。
 - ¥HKEY_LOCAL_MACHINE ¥ SOFTWARE ¥ Fujitsu ¥Install ¥ Securecrypto Library R ¥ Parent Product 配下のキーが"INTERSTAGE"だけの場合

以下のキーを削除してください。

- ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥Securecrypto Library R
- ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥SecurecryptoLibraryCommon
- ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Securecrypto Library R
- ¥ HKEY_LOCAL_MACHINE ¥ SOFTWARE ¥ Fujitsu ¥ Install ¥ Securecrypto Library R ¥ Parent Product 配下のキーが"INTERSTAGE"だけではない場合

以下のキーを削除してください。

- ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥Securecrypto Library R¥Parent Product¥INTERSTAGE

・ F3FSSMEEのファイルが残っている場合は、以下に従い削除してください。

レジストリの ¥ HKEY_LOCAL_MACHINE ¥ SOFTWARE ¥ Fujitsu ¥ Install ¥ F3FSSMEE ¥ Parent Product 配下のキーが"INTERSTAGE"だけの場合、以下の資材を削除してください。 "INTERSTAGE"以外のキーが存在する場合は、削除しないでください。

- C:¥Program Files¥Common Files¥Fujitsu Shared¥F3FSSMEEフォルダ (システムドライブがC:の場合)
- C:¥Program Files¥F3FSSMEEフォルダ(システムドライブがC:の場合)
- WINSYSDIR¥system32配下の以下のdll

f3eztdat.dll F3FGssl4.dll F3FGssl6.dll F3FPSASN.dll F3FPSP07.dll F3FPSP11.dll F3FSBCER.DLL F3FSBCMN.DLL F3FSBKEY.DLL F3FSCRTM.DLL F3FSCRTM2.dll F3FSCRTM3.dll f3fsscmi.dll f3fssmime.dll F3FSTP12.dll F5eubcer.dll F5EUBCEX.dll F5EUbcmn.dll F5eubkey.dll F5EUJSCM.dll F5EUscmi.dll F5EUsmime.dll F5EUsp07.dll F5EUsp11.dll F5EUssl4.dll F5EUssl6.dll F5eutp12.dll

・ Securecrypto Library Rのファイルが残っている場合は、以下に従い削除してください。

レジストリの¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥Securecrypto Library R¥ Parent Product配下のキーが"INTERSTAGE"だけの場合、以下の資材を削除してください。 "INTERSTAGE"以外のキーが存在する場合は、削除しないでください。

- C:¥Program Files¥SecurecryptoLibraryRフォルダ(システムドライブがC:の場合)
- WINSYSDIR¥system32配下の以下のdll
 - F3EZsclcmd.dll F3EZcmn.dll F3EZdat.dll F3EZeex.dll F3EZmain.dll F3EZscl.dll F3EZscl2.dll

不適切な画面が表示された場合

Interstageのインストール時に、以下のような画面が表示された場合、ターミナルサービスが実行モードの可能性があります。

・ Windows® 2000の場合

以下の画面の[OK]をクリックし、"4.1 インストール前に必須な作業"を行った後、Interstageのインストールを行ってください。

ターミナル ち	ナーバー インストールの失敗	×
8	プログラムをインストールするには、ターミナル サーバーがインストール モードである必要があります。コントロール パネルの [<u>アプリケーションの追加と削除</u>] を使ってプログラムをインストールすると、ターミナル サーバーは自動的にインストール モードになります。	
	<u>(OK</u>]	

・Windows Server® 2003の場合

以下に示す手順でInterstageのインストールを行ってください。

- 1. Interstageのインストール完了、またはコンピュータの再起動を促す画面が表示されるまでインストール作業を行います。
- 2. 表示されている下記の画面の[次へ]をクリックします。

インストール終了後	×
	インストールが終了したら D欠ヘ] をクリックしてください。
	< 戻る(B) (次へ)(2) キャンセル

3. 下記の画面が表示されたら[完了]をクリックします。

管理者インストールの完了		×
	インストールが(成功または失敗にかかわらず)終了したら、[完了]ま たは [キャンセル] をクリックしてください。インストールが完了 するまでは 絶対にボタンをクリックしないでください!	
	< 戻る(B) <u>完了</u> キャンセル	

4. Interstageのインストール完了、またはコンピュータの再起動を促す画面の[完了]をクリックします。

イベントビューアにtd11052の警告メッセージが出力された場合

インストール時にイベントビューアに下記警告メッセージが出力される場合があります。

・ TD: 警告: td11052:ワークユニットの自動起動に失敗しました(IJServer-definition error)

上記の場合、問題はありませんのでメッセージは無視してください。

Java EE機能のセットアップに失敗した場合

Java EE機能に関する以下のメッセージが出力され、その後Interstage Java EE DASサービスおよびInterstage Java EE Node Agentサービスの起動に失敗する場合があります。

ijinitの実行に失敗しました

上記の場合、インストールの終了後にijinitコマンドを実行してJava EE運用環境の初期化を行ってください。ijinitコマンドの詳細については、"Java EE運用ガイド"を参照してください。

第5章 特定の機能に関する注意事項

特定の機能に関する注意事項について説明します。

5.1 マルチサーバ管理機能

マルチサーバ管理機能を使用する場合、サーバグループに所属するすべての管理対象サーバにおいて、同じインストールフォルダ にインストールする必要があります。たとえインストールフォルダに同じフォルダ名を指定しても、短いパス(ショートパス)となり、異なる フォルダ名として扱われる場合があります。

インストールフォルダ名が短いパス(ショートパス)として扱われる場合の条件を以下に示します。

- 1. インストール時に、"インストール先の選択"画面で、インストールフォルダに空白を含むフォルダ名を指定した場合、かつ
- 2.1.で指定したフォルダと同じ階層に、先頭文字からn文字(注)以上の範囲が重複(一致)する名前のフォルダが存在した場合。

注) nは、重複するフォルダの数に応じて、以下のように異なります。

フォルダの数が2~9の場合:6文字

フォルダの数が10~99の場合:5文字

フォルダの数が100~999の場合:4文字

ショートパスが異なる問題

マルチサーバ環境において、インストールフォルダと同じ階層に、フォルダ構成がサーバ間で異なる(重複した名前のフォルダが存在 する/しないなど)場合、同じ名前のインストールフォルダを指定してもサーバ間で短いパス(ショートパス)が異なってしまいます。 その結果、管理対象サーバ間で環境定義内容が異なり、サーバグループへ管理対象サーバを追加する際にエラーが発生します。

サーバ名	サーバA	サーバB
インストール先のフォルダ構成	"C:¥Interstage A"が存在する	Cドライブには、"Inte"から始まる フォルダが存在しない
指定したインストールフォルダ名	"C:¥Interstage B"	"C:¥Interstage B"
インストールフォルダの短いパス (ショートパス)名	"C:¥INTERS~2"	"C:¥INTERS~1"

関 ポイント

ショートパス名は、コマンドプロンプト上で"dir/X"と実行することで調べることができます。

対処

マルチサーバ環境を構築するにあたり、すべての管理対象サーバのインストールフォルダについて以下を確認してください。

- 1. 先頭文字から4~6文字で、重複するフォルダ名が他にないかを確認します。
- 2. 1.で重複するフォルダ名がすでに存在している場合は、名前を変更するか、または空白を含まないフォルダ名を指定します。すべての管理対象サーバに対して同じ設定を行います。

上記の例の場合は、サーバAにおいて、"C:¥Inters"の部分で重複しているフォルダ名が存在するため、この部分を重複しないよう"C: ¥IS"に変更するか、空白を含まないように"C:¥Interstage"または"C:¥InterstageB"などを指定してください。サーバAおよびサーバBに 同じ設定を行います。 なお誤って重複したフォルダ名でインストールした場合は、Interstageをアンインストールし、再インストール時に上記の要領で正しいフォルダ名を設定してください。

5.2 Webサーバ(Interstage HTTP Server)

管理サーバ機能のインストール直後は、Webサーバの動作環境が作成されません。管理サーバ機能をインストールしたシステム上のWeb サーバを運用する必要がある場合は、ihscreateコマンドを使用してWebサーバの動作環境を作成してください。ihscreateコマンドにつ いては、"リファレンスマニュアル(コマンド編)"の"Interstage HTTP Server運用コマンド"を参照してください。

5.3 Fujitsu Enabler

Fujitsu Enablerサービスが使用するポート番号について

Fujitsu Enablerサービスが使用するポート番号の初期値は9700です。 Fujitsu Enablerサービスの使用するポート番号を初期値から変更したい場合は、以下の方法で他のアプリケーションや他のFujitsu Enabler のデータストアが使用していないものに変更してください。

%IS_HOME%¥Enabler¥server¥bin¥omschangeport.exe -u "新しいポート番号"

Fujitsu Enablerサービスのポート番号を変更する場合は、以下の状態である必要があります。

- Fujitsu Enablerサービスが起動している
- ・ Interstage ディレクトリサービスのリポジトリが停止している

なお、Fujitsu Enablerサービスが使用しているポート番号は、以下のファイルに定義されています。"OMS_SERVICE="に定義されている値が、Fujitsu Enablerサービスが使用しているポート番号です。

%IS_HOME%¥Enabler¥server¥param¥enabler.conf

リポジトリが使用するポート番号について

リポジトリが使用するポート番号の初期値は、6000~65535のうち、リポジトリ生成時に使用されていない番号です。リポジトリの使用するポート番号を初期値から変更したい場合は、以下の方法で他のアプリケーションや他のFujitsu Enablerのデータストアが使用していないものに変更してください。

%IS_HOME%¥Enabler¥server¥bin¥omschangeport.exe "リポジトリ名" -pn "新しいポート番号"

なお、Fujitsu Enablerのデータストアが使用しているポート番号は、以下の方法で、確認してください。

%IS_HOME%¥Enabler¥server¥bin¥omslist.exe -|



rep001: server=host01 port=6000 XF rep002: server=host01 port=6001 XF 「port」の値が、Fujitsu Enablerのデータストアが使用しているポート番号です。

5.4 JDK/JRE

ホスト名に設定できる文字

ホスト名には、以下に示す文字を使用してください。

• アルファベット大文字("A"~"Z")

- アルファベット小文字("a"~"z")
- ・数字("0"~"9")(注1)
- ハイフン("-")(注2)
- ・ ピリオド(".") (注2)

(注1) 最後のピリオドの直後には、数字は使用できません。 (注2) ハイフンおよびピリオドは、ホスト名の先頭文字として使用できません。また、ピリオドは、ホスト名の最後に指定できません。

JDK/JREを使用する場合、ホスト名には、上記以外の文字を使用できません。

ホスト名に上記以外の文字(例: "_"(アンダースコア))を使用した場合、インストール時に、Interstage Operation Toolサービスの起動に 失敗した旨のエラーダイアログが、表示されます。エラーダイアログの表示後もインストール処理は継続されますが、IJServerの作成に 失敗した旨のエラーダイアログが表示されます。

インストール完了後、Interstage管理コンソールにログインすると、「IS: エラー: is40003: Interstage JMXサービスに接続できませんで した」のメッセージが出力され、Interstageの運用操作は行えません。

5.5 MessageQueueDirector

MessageQueueDirectorのACM連携サービスを使用する場合

- ・ IDCM(V1.0L60以降)を別途インストールすることが必要です。インストール手順については、Interstageサーバパッケージの以下のファイルを参照してください。
 - インストールCD-ROM内の"¥IDCM¥DISK1¥README.TXT"
- ・ IDCM V1.0L60を使用する場合、以下の応急修正を適用する必要があります。
 - TP02836

なお本応急修正を適用したIDCM V1.0L60をInterstage Application Server Enterprise EditionサーバパッケージのインストールCD-ROM内の"IDCM"フォルダに同梱しています。

5.6 MQ連携サービス

- ・ MQ連携サービスを使用する場合は別途インストールが必要です。MQ連携サービスは、Interstageサーバパッケージのインストール CD-ROM内の"MQDBRIDGE"フォルダに同梱しています。インストール手順については、以下のファイルを参照してください。
 - インストールCD-ROM内の"¥MQDBRIDGE¥README.TXT"

・ サーバタイプとして「管理サーバ機能をインストール」または「Web Package機能をインストール」を選択した場合、MQ連携サービス は使用できません。

5.7 フレームワーク

動作環境の設定方法の詳細については、"Apcoordinatorユーザーズガイド"を参照してください。

INTERSTAGE WEBCOORDINATOR V4.0が提供していたFormcoordinator連携機能を利用する場合は、別途Formcoordinator連携 互換機能のインストールが必要です。インストール方法は、インストールCD-ROM内の"¥IFORM¥readme.txt"を参照してください。

付録A Fujitsu XMLプロセッサのインストール

Fujitsu XMLプロセッサはInterstageのインストールではインストールされません。インストールCD-ROMをコンピュータのCD-ROMドライブにセットし、以下の作業を行ってください。

- 1. インストールCD-ROM内の"¥XML¥setup.exe"をダブルクリックし、表示される画面に従いFujitsu XMLプロセッサをインストール してください。
- 2. インストール終了時に、コンピュータの再起動の確認ダイアログが表示された場合は、必ず再起動を行ってください。

なおFujitsu XMLプロセッサのマニュアルはFujitsu XMLプロセッサのインストール後、[スタート]>[プログラム]>[Fujitsu XMLプロセッサ V5.2]で参照してください。



- ・「アプリケーションの追加と削除」に旧バージョンと新バージョンの両方が表示される場合がありますが、Fujitsu XMLプロセッサは 新バージョンに置き換わっており動作には問題ありません。
- ターミナルサービスが実行モードの状態でインストーラを起動した場合は、一度インストーラを終了させ、以下のコマンドを実行して、ターミナルサービスをインストールモードに変更してください。インストール完了後は、以下のコマンドを実行して、実行モードに変更してください。
 実行モードでインストールを行った場合、正常にインストールされません。Fujitsu XMLプロセッサをアンインストール後、ターミナルサービスをインストールモードに変更した後、再度インストールを行ってください。

[インストール前] CHANGE USER /INSTALL

[インストール終了後] CHANGE USER /EXECUTE

付録B サイレントインストール

通常、本製品をインストールする場合、利用する各機能で必要な情報を対話形式で入力します。 サイレントインストール機能を利用することにより、同じ設定でインストールする場合には、対話形式の情報入力を一切行わずインストー ルすることができます。

使用上の条件

- ・ Interstageが、対象のシステムにインストールされている場合には、本機能を使用することはできません。 事前に、Interstageをアンインストールしてから実施してください。
- ターミナルサービスが運用されている環境においては、ターミナルサービスをインストールモードに変更してから実施してください。
 ターミナルサービスが実行モードの状態で本機能を実行するとインストールに失敗します。

インストールモードへの変更方法

CHANGE USER / INSTALL

サイレントインストールの手順

以下の手順でインストールしてください。

1. サイレントインストール応答ファイルの作成

サイレントインストールを行う場合、対話形式で入力する情報が記述された応答ファイルを作成する必要があります。応答ファイルは、以下の手順で一度インストールを行い、そのインストール情報から作成します。

1. インストーラの起動

応答ファイルを作成する場合、以下のパラメタでインストーラを起動してください。

(CD-ROMドライブ)¥ISTAGE¥Disk1¥issetup.exe -r

2. 必要な機能の選択と設定

通常のインストールと同様に、サーバタイプ、インストールタイプ、機能を選択してください。また、必要に応じて設定値を 変更してください。ここで設定した内容と同一の設定でサイレントインストール対象のコンピュータにもインストールされま す。

3. 応答ファイルの作成

実際にインストールを実行します。インストール後、Windowsシステムルートフォルダ配下にsetup.issという応答ファイルが 作成されます。

2. サイレントインストールの実行

"1.サイレントインストール応答ファイルの作成"で作成した応答ファイル(setup.iss)を用いてサイレントインストールを実行します。

1. 応答ファイル(setup.iss)の格納

サイレントインストールを行うコンピュータ上の任意のフォルダに応答ファイル(setup.iss)を格納してください。

2. サイレントインストールの実行

CD-ROMドライブにサーバパッケージのCD-ROMをセットし、以下のパラメタでインストーラを起動します。このとき、インストール結果を保存するログファイルも指定します。なお、コマンド実行後、すぐ復帰しますが、インストールは実行されます。

例)応答ファイルがc:¥tmp¥setup.iss、ログファイルがc:¥tmp¥setup.logの場合

(CD-ROMドライブ)¥ISTAGE¥Disk1¥issetup.exe -s -f1c:¥tmp¥setup.iss -f2c:¥tmp¥setup.log

※上記の操作は1コマンドです。改行を入れずに実行してください。

3. インストール結果の確認

ログファイルを開き、[ResponseResult]セクションの"ResultCode"を参照してください。以下に復帰値の意味を記載します。

ResponseR esultの値	意味
0	インストール成功
-1	インストール失敗 インストール途中に、インストーラがエラーを検出した場合
-3	対象システムの環境により、応答ファイルと異なるシーケンスで実行された場合
	 インストールフォルダ配下にInterstageの資源が残っている、またはInterstage がインストール済
	・ ディスク容量不足
	・ 排他ソフトウェアが存在
	・ 応答ファイル作成時に設定したポート番号が使用されている。
	 ・異なるバージョン・レベル/エディション、またはクライアントパッケージのインストーラを用いて作成した応答ファイルを指定した場合。
-5	指定した応答ファイル(setup.iss)が見つからない
-8	応答ファイルの内容が不当

エラーが発生した場合の対処

ログファイルの[ResponseResult]セクションの"ResultCode"にエラーが設定されている場合、以下で該当する対処を実施し、サイレント インストールを実行してください。

ResponseRe sultの値	対処
-1	インストール中にエラーが発生しています。 以下の資料を採取し、技術員に連絡してください。
	・ Windowsシステムルートフォルダ配下のisasinst.log
-3	以下を確認し、各々のエラーとなる原因を取り除いてください。
	・ 指定したインストールフォルダ配下にInterstageの資源が残っている場合には、指定した フォルダを削除またはインストールフォルダを変更してください。
	・ Interstageがインストール済の場合は、インストール済のInterstageをアンインストールしてから、再度インストールを実施してください。
	 インストール先のディスク容量が不足している場合は、ディスクに必要な空きを作ってから インストールを実施してください。
	 ・排他ソフトウェアが存在する場合には、排他ソフトウェアをアンインストール後、再度インストールを実施してください。
	 応答ファイル作成時に設定したポート番号が他のアプリケーションに使用されている場合は、該当のアプリケーションを停止させてから、再度インストールしてください。この場合に本製品を正常に運用するためには、該当するポート番号を他のアプリケーションで使用しないようにするか、本製品のポート番号の設定をカスタマイズする必要があります。

ResponseRe sultの値	対処
	 応答ファイルは、同一のバージョン・レベル/エディションのサーバパッケージ用インストー ラで作成したファイルを指定してください。
-5	指定した応答ファイル(setup.iss)が見つからないため、サイレントインストール実行時に指定した応答ファイルのパスに誤りがないか確認してください。
-8	指定した応答ファイル(setup.iss)が壊れている可能性があります。応答ファイルを再作成してから、再度インストールを実施してください。
上記以外	以下の資料を採取して、技術員に連絡してください。
	・ 使用した応答ファイル
	・ ログファイル
	 システムフォルダ配下に出力されるisasinst.log(通常は、"c:¥Windows¥isasinst.log"に出 力されます。)

注意事項

- ・応答ファイルは、インストーラが確実に終了(InstallShield Wizardの完了画面で完了ボタンを選択)した後で取得してください。
- サイレントインストールを実行するコンピュータ上には、応答ファイル作成時に指定したインストールフォルダと同じドライブを準備 する必要があります。
- サイレントインストールは、非同期で実行されます。サイレントインストール直後にセットアップなどの処理を行う場合はご注意ください。
- ログファイルの[ResponseResult]セクションの"ResultCode"には、サイレントインストール終了時に最終結果が書き込まれます。イン ストール実行中は、インストール成功を示す"0"が設定されていますので、サイレントインストールの実行プロセスである"setup.exe" または、"_is[X].exe"([X]は1~4桁の16進数)が終了してから確認してください。
- Windows Server(R) 2008でサイレントインストールを実行する場合、ユーザーアカウント制御(UAC)の警告メッセージが表示されることがありますが、処理を続行してください。なお、ユーザーアカウント制御を無効化することで表示を抑止することもできます。
- ・環境変数の設定値の有効長を超えてしまうなどで、本製品で使用する環境変数の設定に失敗した場合、インストール終了前に、 環境変数の設定に失敗した旨と該当する環境変数名が警告ポップアップにて表示されます。この場合、インストール終了後に該 当する環境変数から不要な設定を削除し、以下のファイルに記述されているパス情報を追加した後、コンピュータを再起動してく ださい。
 - 環境変数PATHの設定に失敗した場合: インストールフォルダ¥path.txt
 - 環境変数CLASSPATHの設定に失敗した場合: インストールフォルダ¥classpath.txt
- インストール前にターミナルサービスをインストールモードに変更した場合、インストール終了後に実行モードに変更してください。

実行モードへの変更方法

CHANGE USER /EXECUTE

付録C Interstage管理コンソールによるInterstage運用を安全に ご利用いただくモデル

Interstage管理コンソールは、Interstage Application Serverの各サービスに対する操作ビューを統合しており、一元的な操作を実現しています。

ここでは、標準インストールによりインストールされるInterstageを、Interstage管理コンソールにより安全に運用する方法として、ひとつの モデルを説明します。

• Interstage管理コンソールによるInterstage運用を安全にご利用いただくモデル

Interstage管理コンソールの詳細は、"運用ガイド(基本編)"を参照してください。

Interstage管理コンソールによるInterstage運用を安全にご利用いただくモデル

標準インストールによりインストールされるInterstageを、Interstage管理コンソールにより安全に運用する方法として、10個のポイントを説明します。

- ・ Interstageをインストールするマシンは、信頼できない者の立入りが禁止されたシステム運用区画に配置します。
- ・ OSへのリモートログインサービスをすべて停止してください。rlogin、rsh、telnet、ftpなどのリモートログインを可能とするプロセスが 動作していないことを確認し、動作していた場合にはすべて停止してください。
- ・ Interstageをインストールするとき、Interstage管理コンソールの"運用形態の選択"画面で、「SSL暗号化通信を使用する。(U)」を選択します。
- ・ Interstage管理コンソールを使用するユーザは、割り当てられたロールに課せられた責務に責任を持ち、不正な行為を行わない者 に限定します。ロールについては、"運用ガイド(基本編)"を参照してください。
- 本製品で使用するアプリケーションは、作成元が特定できること、また、作成元でのテストによって品質が確保されていることを確認してから、動作させるようにしてください。
- ・ 資源のバックアップ/リストアなどの保守操作時を除き、通常の運用操作はInterstage管理コンソールだけで行ってください。
- 不正アクセス、誤操作などによるデータ破壊に起因するシステム異常に対処するため、保護対象資源は定期的にバックアップを 採取してください。
- アプリケーションそのものは正しく作成されていても、ネットワークやハードウェアの異常などによりアプリケーションの異常終了や長時間停止が発生することがあります。アプリケーションのこれらの異常への対応方針を決定し、それに基づいて、ワークユニットのリトライカウント、アプリケーション最大処理時間などの設定を行ってください。
- ・ユーザ認証には、汎用的なOS認証を使用してください。
- ・ Interstage管理コンソールを動作させるブラウザは、128ビット以上の暗号に対応したものを使用してください。

付録D Java監視機能のインストール

ここではJava監視機能をインストールする方法および注意事項を説明します。

D.1 インストール時に必要な環境

Java監視機能は、32ビット環境のWindowsで動作するプログラムです。 Java監視機能をインストールする場合には、約350MBのディスク容量が必要です。

D.2 Java監視機能のインストール

Java監視機能は、以下の手順でインストールしてください。



インストール前にすべてのアプリケーションを終了してください

インストールを行う前に、すべてのアプリケーションを終了させてください。 Java監視機能をインストールする際に、Java監視機能が利用するディスク、レジストリ等の資源を使用しているとインストール作業に失 敗する場合があります(例:イベントビューア、エクスプローラ、レジストリエディタ等)。

- 1. インストールCD-ROM(オプションパッケージ CD)をコンピュータのCD-ROMドライブにセットし、インストールCD-ROM内の"¥fjconsole¥setup.exe"を実行して、表示される画面で[次へ]ボタンをクリックしてください。
- 2. "インストール先の選択"画面で、[参照]ボタンをクリックし、Java監視機能のインストール先を設定し、[次へ]ボタンをクリックして ください。



インストール先について

- インストールフォルダ名に、":"、"/"、"*"、"?"、"<"、">"、"|"、"""は指定できません。
- 一度設定したフォルダ以外の別フォルダを設定しなおした場合、先に作成したフォルダが残る場合があります。必要に応じて削除してください。

注意

"フォルダの選択"画面について

"インストール先の選択"画面で[参照]ボタンをクリックすると、"フォルダの選択"画面が表示されます。 "フォルダの選択"画面を表示中にカーソルを他の画面に移動し、再度"フォルダの選択"画面にカーソルを戻した時、"フォル ダの選択"画面からカーソルが消える場合があります。 "フォルダの選択"画面を表示中は、他の画面にカーソルを移動させないでください。 カーソルが消える現象が発生した場合、"フォルダの選択"画面にカーソルを戻した状態で[キャンセル]ボタンをクリックし、一 旦"インストール先の選択"画面に戻してから、再度、[参照]ボタンをクリックして"フォルダの選択"画面を表示しなおしてください。 3. "ファイル コピーの開始"画面で、入力内容の確認を行い、内容に誤りがなければ、[次へ]ボタンをクリックしてください。インストールが開始されます。



4. インストール完了後、[完了]ボタンをクリックして終了してください。

D.3 注意事項

Java監視機能をインストール場合、以下の点を注意してください。

- ・ Java監視機能のインストールは、コンピュータの管理者もしくはAdministratorsグループのメンバーで行ってください。
- インストールを行う前にすべてのアプリケーションを終了させてください。 Java監視機能をインストールする際に、Java監視機能が利用するディスク、レジストリ等の資源を使用しているとインストール作業に 失敗する場合があります(例:イベントビューア、エクスプローラ、レジストリエディタ等)。
- ・ Java監視機能が既にインストールしてある状態で、本インストーラを実行した場合は、実際のインストールは行わず、インストール完 了画面が表示されます。
- Java監視機能をインストールする際、"インストール先の選択"画面に表示されるバージョン表記は「V9.2.0」となります。また、アンインストールする際、コントロールパネルの「アプリケーションの追加と削除(OSによっては、「プログラムの追加と削除」あるいは「プログラムと機能」と表示される場合があります。)」に登録される製品名のバージョン表記においても「V9.2.0」となっています。